

とある木原の確率操作

々々

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『木原』の落ちこぼれ○の少年の物語。

自分がしたいように振る舞う彼に振り回される学園都市。

彼の気分次第で計画が尽く崩される科学者と魔術師たち。

彼は自由奔放をやめない。彼は自重しない。

目次

とある確率操作の暇つぶし	1	とある確率好きの少年	57
木原分数に対するとあるレポート	8	病院のとある1コマ	63
『確率操作』のとある暗躍	13	とある少年の	70
とある魔術の禁書目録	18	とある終焉ととある人物紹介	75
とある不遇なステイルⅡマグナス	24	病院のとある2コマ目	83
後輩思いのとある先輩	30	病院のとある3コマ目	89
一人悩むとある少女	37	とある錬金術師の	95
とある一休み	43	とある昼下がり	104
とある異界の幻想猛獣	47	とある夜戦 その1	109
とある魔術の木原分数	52	とある夜戦 その2	114
		とある夜戦 その3	120
		U A 1 0 0 0 突破記念 & ヒロイン	125
		決定記念	125

ハッピーエンドまでの序奏／とある乙女

の恋心1 138

とある乙女の恋心2／木原達のとある計

画 144

とある決着のつき方 150

とある8月31日の過ごし方 そのいち

156

とある8月31日の過ごし方 そのに

とある確率操作の暇つぶし

「暑い、怠い、面倒くさい。飾利後輩よ、代わりにこれをやってくれ」

春が終わり夏に近づくにつれてだんだんと気温が上昇するなか、ジャツジメント風紀委員本部所属、ぶそく現第一七七支部臨時所属の木原分数は自分の机に突つ伏していた。

「そんなのでどうしますの先輩。それに初春はここにいませんのよ」

悪態をつく彼に白井黒子がツツコミを入れる。出会ってからそれほど多くの月日が経ってはいないが、数多くの仕事を共にしてきたためそれなりの関係が築かれていた。そんな彼女の言葉が気に入らず再び口を開ける。

「それもこれも飾利が『私超電磁砲レールガンに会ってみたいです』なんて言うからだろ。そこに黒子も乗っちゃってさ『紹介しますの』なんて言っちゃってよ。またまた固法が『それなら分数くんに全部の仕事回しちゃっていいわよ』ってふざけんなよ!!」

「落ち着いてくださいまし木原先輩。それは本当に申し訳ないと思っておりますの、私もこんな事になるとは思っていませんでしたの」

「分かつてるさその位。逆に謝られても困るってか、こっちが悲しくなってきたからさ」
ガシガシと頭を掻き、バツの悪そうな顔をする。

「つてか『木原先輩』は止めてくれ。前から言ってるが俺のことは下の名前で呼べ。…俺はあの一族から離れたんだから」

「あら、またやつてしまいましたわ。これから気をつけますの」

最後の言葉はどうやら聞こえていなかったと安堵のため息を漏らす。

「『木原』は科学に対しての副産物の一種らしく『純粋な科学の一分野を悪用しようと思いう時にその一分野に現れる実行者』が木原であるだとかなんとか。『実験に際し一切のブレーキを掛けず、実験体の限界を無視して壊す』ことを信条とするため、実験体に配慮し実験を成功させるような者は、どれだけ優秀であろうとも落ちこぼれ扱いされるらしい。だから俺は『木原』の落ちこぼれになった。気がついていたら自分に『能力開発』をして、自分までも『実験体』するとかなにやつてんだって感じだがな。それなら自分の身もぐちやぐちやにしてでも『木原』を貫くべきだったか?」ほんとは嫌になっちゃうぜ」

「いきなりどうしましたの?」

「いんやなんでもないさ。それよりも時間いいのか? お前から聞いてた時間にそろそろなりそうなんだが」

「え?! お姉様を待たせる訳にはいきませんの!! それでは先輩よろしくお願ひしますの!!」

能力で御坂のところに向かって手を振る分数。演算をし、出た結果を口に出す。

「彼女らが事件に巻き込まれる確率は100%か。ちやつちやつと仕事を終わらせて、彼女たちに会いに行きますかね」

誰もいない部屋に彼の言葉が木霊した。

御坂と黒子と初春、そして佐天の四人は広場で仲良くクレープを食べていた。黒子は御坂にクレープを（無理やり？）食べさせようとし、初春と佐天は話をしていた。

「レベル5って言うっても私達とあんまり変わらないんだね」

クレープをパクツと口に入れ、佐天が話す。

「そうですね佐天さん。私ももつと違いがあるんだと思ってみました。どうせなら分数さんも一緒に紹介したかったんですが」

「その分数さんって初春の部署の先輩だっけ？」

「そうです!!本部から派遣されてきた人なんですけど、ネットとかでは『本部からくる人は支部の人を馬鹿にしている』とか悪い印象しか書かれてなかったんですが、実際会ってみると優しい人で、分数さんだけかもしれないんですけど。でも!!私達のことを気に

かけててくれて、お兄ちゃんがいたらこんな感じなのかなって思ってるんですよ!!」

クレープを置き、興奮気味に話す初春に佐天は少し引き気味に答える。

「そ、そうなんだ。けど初春がそんなに言うなら会ってみたいな〜」

「ならこの後支部に行ってみますか？きつといえると思います」

そんな話をする二人の目にシャッターが降りた銀行が映った。

「ねえ初春。こんな真つ昼間からシャッター降ろす銀行ってあるのかな？」

「分かりません、何かあったん……」

ですかね、と続けようとしたところ。その銀行が爆発する。初春は携帯を取り出しすぐに支部と警備員アンチスキャルに連絡をする。黒子は持っていたクレープを急いで食べ、風紀委員の腕章を付け、銀行に向かう。そんな中、御坂が手伝うと声を上げた。

「お姉様はここで待っていてください。こんな事件、私一人でできますの。お姉様の手を煩わせるわけにはいきませんのよ」

その発言通り黒子はあつという間に犯人グループを逮捕した。だが一人が逃げていることに気が付かなかつた。その彼が一人の幼児を連れて行くこうとしているのを見つけた佐天は単身でその男の元へ向かっていった。

「ちよつと待ちなさいよ。その子をどうするつもり？」

「うるせえな、なんだ？邪魔するつもりか？」

自分でも何故こんな事をしたのか理解できていない佐天の足は震えている。

「そ、そうよ。だからその子から手を離しなさい」

「どうしたんだ嬢ちゃん足が震えてるぞ」

「ふ、震えてなんかいいわよ。あなたが手を離さないなら、私もここから離れないわ」

「ちっ、面倒だな。殴ってやらなきゃ分からねえのか？なら殴ってやるよ」

やってくる拳の前に目を瞑った彼女の耳に優しい声が届いた。

「そう？なら君が言った『殴ってやる』という確率を0にしてやろう」

いつまでたっても衝撃が来ない佐天は、閉じていた目を開く。すると彼女の目には、目前まで来ているのに拳が届いていない男を見た。

「うん。君の覚悟はなかなかのものだ。でもね、気をつけなきゃいつか君の身を滅ぼす

ことになるよ」

「へ？」

謎の声の正体、分数が佐天の頭を撫でながら語る。頭から手を離し、未だ動けない犯人の脚を払い倒し手錠をかける。

「これにて一見落着くと。その君、悪いけどこの子を保護者か先生の元まで送り届けてくれないか？これからこの犯人を見逃しちゃった娘を叱らなきゃいけないからさ」

無事子供を送り届けた佐天が三人の元に戻ると、先ほどサテンを助けた男性がいた。

「本当に申し訳ありませんの。この白井黒子がすべて悪いんですの」

「(もしかして彼が言ってた『叱らなきゃいけない娘』って白井さんのことだったのかな。だとすると彼は)」

「佐天さん!!」

御坂が駆け寄り、初春が佐天に抱きつく。

「心配しましたのよ佐天さん!!」

「そうです!!いきなりいなくなつて!!あの時も先輩がいなかつたと思うと」

説教の終わった黒子と分数もやって来る。

「申し訳ありませんの佐天さん。私の不注意であんなことに」

「いいのいいの白井さん。ほら私は無事だし、ね?」

「よかつたな黒子。まあ、始末書は書かされるだろうがな」

「あの!先程は助けていただきありがとうございました。なんとお礼を言ったらいいの
か」

「別にいいよ、これが俺の仕事だし。しかし、君が黒子と飾利それにあの超電磁砲の友達
か。頑張れよ」

「こんな機会ですし、分数さんも佐天さんに自己紹介おねがいますよ」

「飾利ちゃんや、俺はわざわざここまで徒歩で来て、いろいろ仕事をして大変疲れている

んですが」

「疲れていても自己紹介くらい出来るでしょうが」

「ちやんとするから、そうビリビリしないですよ」

「ゴホンと咳払いをして分数は自己紹介をする。」

「風紀委員本部所属、第一七七支部臨時所属の木原分数だ。能力は確率操作^{ギャンブラー}、大能力者^{レベル4}だ。後輩の友達ってことはこれから佐天も俺の後輩ってことだから、これからよろしくな」

ニヒルな笑みを浮かべて彼はそう言うのだった。

木原分数に対するとあるレポート

1. 木原分数について

観察対象木原分数きはらぶそく。数多く学園都市にいる『木原一族』の一員とされているが、血縁関係のある『木原』はいない。現在は統括理事長が書類上の保護者となっている。また、『木原』の信条である『実験に際し一切のブレーキを掛けず、実験体の限界を無視して壊す』を破ったため『落ちこぼれ』とされている。本人は『木原』とは縁を切ったと言っているが、目的のために手段を選ばないという「木原らしさ」は残っている模様。木原として司るは『確率』とされており、これが能力に関係していると思われる。(木原一族については別の資料を参考にすること)

現在は『とある高校』に通う高校二年生。交流関係については、同じ高校に通うイマジネーションプレイヤー幻想殺しや魔術側のスパイ、またまた学園都市統括理事会所属の一人、貝積継敏のブレインを務める雲川芹亜と仲がいいようである。

風紀委員に属しており本部所属というエリートであるが、良く仕事をサボりその罰として様々な支部に派遣されている。というのが表向きな理由で実際のところは彼の能力で何かが起こる部署に赴いている。彼が関わった事件は解決率100%というのは

風紀委員上部と統括理事会しか知らない。

暗部にも関わっているようだがそれについての情報は全て削除されており、事実を知るのは本人と統括理事長だけであるだろう。

2. 能力について

大能力者の確率操作。『確率』を司る木原として様々な研究をしていた結果として、自らに能力開発を施し得た能力。実験において素養格付の能力上限が100%出ないことと確信した彼は、自らの素養格付が無能力者であるにもかかわらず大能力者まで開花させた。能力開発の内容や機材、あらゆるものを一人で作り上げた。実験者、被実験者共にただ一人で成し遂げた唯一実験とされている。

本人によると「超能力者は七人であることに意味があるため自分は超能力者になるつもりはない」とのこと。しかし、本当に超能力者になるためにはピースが一つ足りないらしい。実際に超能力者になった場合の順位は1位であると推測される。その訳は超能力者の順位は表向きには『価値』によるため、『価値は』『確率操作』は『一方通行』や『未元物質』より高いからであるため。戦闘においても『確率操作』が超能力者になれば他の超能力者を完封できるとされている。

『確率操作』の内容は『ある事象の確率の観測及び確率の変動』である。大能力者に至る前までは『確率の観測』のみが能力であった。これはどのような事象にも使うことができる。大能力者になってからの『確率の変動』にも条件があり『他者が目の前で声に出した事象』にしか適応されない。

AをBが殺そうとした際のことを例に上げると。その場で思いついた時は『確率操作』では止めることが出来無いが。Bがこの行動を予め『確率操作』の前で「Aを殺すつもり」と言った場合は『確率操作』で止めることができる。これが『確率操作』が超能力者に到れない理由であるとされている。

また他にも『複数の事象に能力を使えない』という弱点があり、かつて計画された『確率操作討伐計画』では複数人での戦闘が行われた。(ちなみに結果は失敗に終わった。能力が無くとも素の戦闘能力が高く、また話術を巧く使い相手に発言させるなどしたのが原因とされているが事実かはハッキリしていない)

3. 『確率操作』のこれからの行動に対する推察

現在は能力開発をしておらず、様々な実験に手を貸している。その数は100にも及び『絶対能力進化計画』や個人の研究など多種多様な模様。また、以前関わっていた『暗

闇の五月計画』に似た実験をしているとの噂もある。

近い将来に魔術側との接触を行い何かを起こす計画を立てている。これは自らの能力に対してなのか、それとも実験の為なのかははっきりしていない。

4. 『我々』にできること

これまでの情報より、『我々』が進めている計画を邪魔されないように阻止することが最も有効である。『確率操作』は神出鬼没なため出会っても動揺せず、この計画の成功については一切話してはならない。

以上を『情報操作』、木原分数の『我々』のレポートとする。

窓のないビルにおいて一人の少年と一人の人間がこれを読んでいた。

「へー、なかなかおもしろいねこれは。父さんはどうだ？」

「ただの現状確認に過ぎない。こんなもの誰だつて作ることができるさ」

「そう言うなって。俺が面白いなって言ったのは、ここまで引つかかってくれた事についてだ。ワザと残しておいた情報を全て拾ってくれた。これで少しは動きやすくなるとは思うさ」

その発言を聞いた人間と、少年は似たような笑みを浮かべた。その場にいた案内人によると、彼らの血縁関係が無いのが信じられないほど同じだったそうだ。

「二応プランは予定通りに行ってるな。省略できるタイミングもピッタリだ。あとは、夏になるまでにどれだけ準備できるかだな」

「そのとおりだ。木山春生による幻想御手^{レベルアップバー}、イギリス清教の禁書目録^{インデックス}しかり。全ては計画通りに事が運びそうだ」

「楽しみだねえ。俺の『確率操作』がどうして働くのか魔術側の考えて分かると良いんだがな」

そう言い残し、少年は運び屋と共に窓のないビルを後にした。

『確率操作』のとある暗躍

とある暗部御用達のプールにて優雅に暇を弄んでいた。プールサイドに置いてある携帯が鳴る。プールから出て体をタオルで拭きながら電話に出る。

「もしもーし、こちらは『確率操作』の電話でーす。あなたは誰で、どんな用事か言つてくださーい春生さん」

「なんだ誰が電話をしたのか分かつてるではないか」

ビーチチェアに座り、テールブルにあるトロピカルジュースを飲む。

「声の感じとかでわかっちゃいましたしー。それで何かあつたんですか?」

「今日は随分と軽いな。……例のアレがそろそろ風紀委員や警備員に見つかりそうなんだが」

「幻想御手ね」

「ふむ」と言つた後、演算を開始する。具体的ではなくある程度の幅を付け『数日以内に真相がバレる確率』を求める。

『確率操作』によればバレるかバレないかは五分五分つてところですね。俺のかわいい後輩たちが頑張つて解決しようとしてるのが原因でしょうね。もしも何かを起こすの

なら早めにやっておくことをオススメしますよ」

「仮に、もしも仮に、私が君に『真相がバレない』確率を100%にしてくれと頼んだらやってくれるか？」

「バカな事言ってるじゃねえぞ春生い」

電話越しでも分かるほど雰囲気が変わった。

「俺がテメエに付き合ってるのは只の科学者としてだぜ？『確率観測』オフサーバー位ならやってはやるが『確率操作』はやってやらないさ。そこんとこ分かってんのか？」

木山からの返答は無い。トロピカルジュースを全て飲み干し、再び口を開く。

「『確率』を司ってた俺としては、なんでも0%や100%に収束する物ほどクソつまらねえ物は無いしな。それくらいドキドキ感がある方が俺は良いと思うがな」

「いや、これは私の方が悪い。元々『確率操作』は使わないという契約だったのだしな」
「まっ、敵の本拠地に乗り込むときは声をかけてくれ。木原幻生のやり方は気に入らねえからな」

「ああ、その時は頼むよ」

通話が切れたのを確認する。

「『春生さんが無事に目的を達成できる確率は』0%ね。あーあ、つまんねーな。0.01%でも有れば手伝ってやったんだが」

トロピカルジュースに口を付けるが喉に流れてこない。

「さつき飲み干しちまったか……。沈利ちやーんおかわり持ってきてー」

麦野が入り口から入ってくる。その後ろにはフレンダもいる。

「なんでいるのが分かったのよ……。フレンダ持つて来なさい」

「えっ!?なんで私が」

「ほら早く持つてきてよ。俺の喉乾いたんだけどー」

「やっぱ私がこき使われる運命にある訳よー!!!」

「フレンダが超高速で走って行ったんですけど何かあつたんですか?」

「あつ、ぶそくだ」

「よっす、最愛に理后!」

自分で聞いたにも関わらずその質問に全く興味を持たなかった絹旗と、そもそもフレンダを気にしていなかった滝壺は二人してプールに入ってしまった。

「はあ、はあ、持つてきたって、訳よ」

息を切らしながらフレンダが戻ってきた。

「ありがとな。お礼に鯖の…」

「鯖の!!」

「鯖の贈り物をしよう。喜べ、一年分だ!!」

「缶詰?」

「いんや、生。一日三匹として360?3匹、明日まとめて送つとくからな。ほれ、さつさとプールに行つてこい!」

「理不尽な訳よー!ー!ー!」

おしりを蹴られてプールに入っていく不遇な女フレンド。彼女の未来に上半身と下半身はくつついているのだろうか。持つてきてもらった(持つてこさせた)ジュースに口をつける。

「ぬるいな。フレンドの手の熱がうつったか」

「フレンドと漫才をする前に私の質問に答えてもらいたかつたんだけど」

麦野は隣のビーチチェアに座り分数に問いかける。

『『アイテムが今日ここに来る確率』が80%、『今日来た場合いつ来るか』の確率が最も高かつたのがたつた今、『一番先にくる確率』が最も高かつたのが沈利だつた。ただそれだけさ、『確率観測』を使つたに過ぎない』

「いつもどおりの返答があがとう。だけど本当にいいの?」

「何が?」

「さっきの電話。またアンタが首を突つ込んだ実験の話じゃ無かつたの?こんなくたらない事に能力使つて、必要な所に使わないのって自分勝手過ぎないかしら」

分数はビーチチェアから立ち上がり、プールに飛び込むために屈伸をし始めた。

「いいんだよ。これは俺が俺のために開発した能力だ。俺がどう使おうといいだろう？」

「はいはいそうね。それならさつきと大能力者から超能力者になりなさいよ」

「ヤダね。これは決定事項だが、俺が超能力者になればどんな『確率』だって思いのままに『操作』する事ができる」

屈伸を止め、麦野に向かい合う。

「でもね、そんな事をしてても面白みが無いだろう？さつきの話を聞いてたら分かるだろうが、分かりきってる物ほどつまらない物は無いのさ。そのつまらなさは俺が木原として『優等生』だった時に身をもって知ったさ。それに、俺が超能力者になったところで順位は最下位さ。どこの誰かが一位になれるとか推測している様だが、俺の研究はこの誰にも渡すつもりはないからよ!!」

最後の言葉を言うと同時にプールに飛び込む。それを見届けた麦野が愚痴を零す。

「ほんつと、アンタの能力の原理が分からないのよね。超能力者にしても、第六位や第七位を除けばキチンと説明出来るのに、アンタの能力は科学的に説明できないのよ。でも『木原だから』って言葉で片付けられるのが嫌ね、『木原を捨てて』もアンタはやっぱり『木原』よ」

とある魔術の禁書目録

七月二十日。学園都市にいる生徒にとつてはただ『夏休みの初日だー!!』程度の認識しかない日だが。統括理事長と分数の二人にとつては待ちに待った日であった。そんな分数は現在、後輩の住んでいる部屋のドアを叩いていた。

「もしもし。当麻後輩よ、さっさとドアを開けやがれ。もし五秒以内に開けないとドアを蹴破るからな。はい、いち、にーい、さーん」

部屋の中からドタドタと音がし、玄関のドアが開けられる。

「はあ、はあ。ど、どうしたんですか先輩?こんな朝早くに、それに物騒なことをいいながら」

「お前のところに魔術師を語る女の子がいるだろ?その子に会いたくてな。部屋に入るけどいいよな。答えは聞いてないけど」

「ちよつと待つてくださいよ!!」

そんな当麻の静止も聞かずにズカズカと部屋に入っていく。すると部屋には白い修道服を着たシスターがちよこんと座っていた。

「おーいたいた。詳しい話はまたするから当麻は補修に行つてこい」

「は？そんな行きませんよ」

「いったら食料を恵んでやるから。それにコイツは俺の領分だ」

いつに無く真剣な分数の顔を見て当麻はしぶしぶ了承して学校に行った。

「それでアナタは一体誰なの？とうまと違つて魔術の事を知つてみたいだけだ」

「まあ、まずは腹ごしらえでもしようか」

当麻には見えないように持っていたビーニール袋から焼きそばを取り出す。テーブルに焼きそばとフォークを置いた瞬間、皿の上から焼きそばが消え去つた。

「うん、美味しかったかも。さつき貰つた焼きそばパン？よりも美味しかったんだよ!!」
先ほど当麻に食べさせられた女の子からの一言。

「そりゃー良かったぜ。魔術サイドのゲストの扱いは丁寧しなきゃいけないしな」

「そう、それだよ。なんでアナタ：インデックスえーと」

「分数だ、木原分数。そつちは禁書目録でいいんだよな？」

「うん、合つてるかも。それでなんで私達、魔術のことを知つてるのかな？」

「そつち側にパイプが有るから。流石にイギリス清教とかの大きな団体は無理だけど、個人なら問題にならないしな。そいつからお前の事を聞いた、何でも10万3000冊の魔導書を記憶しているとか」

「そのとおりなんだよ。私はIndex—Librorum—Prohibitoru

m。 献身的な子羊は強者の知識を守る
dedicatus545なんだよ」

——なんだこの、人間としての成長が見た目とずれてる感じ。まるで妹達シスターズと話しているみたいな。

なんてことを考えつつも笑顔の分数を不思議に思いつつ、インデックスは立ち上がった。

「色々ありがとうぶそく。でもそろそろ行かなくちゃ」

「追手が来るからか？」

深刻な顔をしたインデックスが不自然に笑った。

「うん。ここにいたらぶそくにも、それにとうまにも迷惑かけちゃうかも」

そんなインデックスの頭を乱暴にわしゃわしゃする。

「わわわ!!何するの?」

「お前みたいなのは年上の人に頼るってことを覚えろ!上に話を通して、俺といる間は魔術師が手出しをできないようにしといた。お前あれだろ?最近寝れてないだろ?肌も荒れてるし、目元の隈もひどいぞ。当麻の部屋には無いが俺の部屋には新品の布団もあるし、そこでまずは寝とけ」

「それでも襲ってくるかもしれないよ?」

「それならその時に考えるさ。まずは体を休めることが大事だ」

「うん！ありがとう、ぶそく!!」

ここ最近で一番の笑顔を浮かべるインデックスであった。

「つて事なんで、これからこの子の服を買いに行きます。おーけーですか？操祈ちゃん」
「いいですけどお、それって男子力低く無いですかあ？」

「そうなんだよぶそく。いきなり起こされて、よくわからないままお昼ごはんを食べさせられて、気づいたら町中にいた私の気持ちも考えて欲しいかも!!」

これからインデックスが学園都市に長く滞在することを知っている分数が、インデックスが寝ている最中に食蜂に連絡をしたのだ。

「今俺の知ってる中で（幻想御手で忙しい後輩四人を除いて）一番頼りにできるのはお前なんだ!!（沈利は年齢が遠いし、てかアイテムに仕事入ってるばいし）」

その言葉に食蜂の胸が撃たれた。目をキラキラと輝かせて、分数の腕を取り胸の谷間に挟む。

「よーっし☆張り切っちゃうぞお☆ほら、インデックスも行くわよ」

「ちよっと、待つんだよ。行くとは言っていないんだよーー!!!」

次にインデックスの腕つかみそのまま進んでいく。

——操祈の事だからきつとお洒落な所に行くんだろうか。金はあるから全然構わないんだが。

そう分数が思っていると。

『ごめんなさいね、あなたの可愛いかわいい後輩たちでも、第四位でもなくて』

分数の頭に声が響く。食蜂の心理掌握メンタルアウツによって思考を覗き、直接脳に言葉を書き込む。

——そう拗ねないでくれ。こつちとしてはお前がこの件に関しては一番だと思ってるんだ。

『そんな言葉だけじゃ信じられないわ』

——もしも超電磁砲達が暇でも頼まないし、沈利が暇でも頼まないさ。アイツらが一緒だとインデックスについていろいろ聞かれて、それだけで半日が経っちゃう。操祈は優しいからな、俺が触れて欲しくないところには触れないでいつも通り接してくれてるから感謝してるんだぜ。

声が聞こえなくなつたため腕を掴んでる食蜂を見ると顔を赤くしていた。

——照れちやつた？

『照れてませんっ!!ただアナタがいつもより素直に感謝したから驚いただけだよ』

その間インデックスは見慣れない街並みをキョロキョロ見回していた。

『でもねえ、こんな可愛らしい娘がそんなに危険力を持つてるかしらね』

——彼女自身じゃなくて、彼女の持つてる知識だけだな。インデックス一人によって世界規模の戦争だって起こせるさ。

二人してインデックスを見る。その視線に気が付いたのか二人を見つめて、ニコツと笑う。

『かわいいわあ☆』

——たしかにな。そうだ操析、電話で行ったようにインデックスには能力を使つてないよな？

『ええ、分數さんに使うなど言われましたから。その時は詳しく教えてもらえませんでした。』

——さっき言ったインデックスの知識、それは常人にとつては毒なのさ。少しでも見ただけでソイツは廃人になっちまう。俺の護りたい人がそうなるのはもう見たくない、ただそれだけさ。

とある不遇なスタイルⅡマグヌス

「今日とはーっっても楽しかったんだよ!!」

食蜂セレクトの服屋やアクセサリーショップを見たあとケータイショップに行ったりと、初めての事ばかりで興奮しっぱなしの禁書目録と帰路についている所だった。分数に買ってもらった携帯電話の袋を持ち上げて分数に話しかける。

「みさきが言ってたんだけど、この『けいたいでんわ』を使えばいつでもどこでもお話し出来るんだって!!他にもお手紙を出して、すぐに返事ももらえたりするんだって!!」

そんなはしやぎまくるインデックスと共に学生マンションまで数分というところまでやって来た。そこでふとインデックスに周りがある店などを紹介しようとした。

「ちよつと遠回りになるけどこっちから行こうぜ。周りにもあるものも紹介したいし」

本来の道とは別の方へと歩みを進めようとする分数のうでをとる。

「どうした?」

「ねえ分数?今『本当はそのまま行こう』としてなかった?」

「ああ、そうだが?それが何かあるか?」

「あれを見て」

インデックスが指し示した先には小さなカードがあった。

「なんだあれ？」

「ルーンって言って、簡単に説明すると魔術に使う道具なの。私を追いかけてくる魔術師にルーンを使う人がいたから、きつとその人のものだと思う。効果は『人払い』、さつきみたいに無意識のうちに行かないようにできるの」

「てことは、人に見せられないような事をやってるのか……。待ち伏せて事もあがるが、行ってみるか？」

「うん」

「待ってください」

そのまま学生マンションに向かおうとした二人を呼びかける声があった。分数はインデックスを後ろに隠し、その声の主と向き合った。裾を結んで短くしたYシャツに、片方だけ短いジーンズ。何故か目元が赤かった。

「わわわっ」

「へー、そっち側じゃそんな格好が流行ってるんだ」

「見ただけで私が魔術師だと分かりますか」

「何言ってるんだねーさん。こっちじゃいくら奇抜だからってそんな服装は流行らねーし、それにそんなでっかい刀を持つてるやつなんかそうそう居ないさ」

明らかに煽るように発言する。

「それで何のようだ、魔術師」

「別にあなたと戦闘を行いに来た訳ではありません。あなたが今朝話をしていたあの子……インデックスのことについて話をしに来たのです」

後ろで裾を強く引つ張られるのを感じる、掴まれていた腕を離して頭を撫でる。

「へえ、それでインデックスがどうした?」

「先程私達が無事に保護したので彼女の事は気にしないでください、と伝えたかっただけですよ」

「私はここにいるんだよ!!」

分数の後ろからインデックスが声を上げる。すると、魔術師は混乱したのか、ひとりでごごとを言い始めた

「えっ、何故。先程私が歩く教会があるから大丈夫だと思って『エイツ☆』と、斬^やつてまっただけでは……」

「どうするインデックス。敵さんが何だか混乱してるけど、この隙に逃げちゃう?」

「逃げれるならそうしたいけど無理なんだよ。あつちは聖人^{つて}言^{つて}、私達より肉体的に優れてるんだよ」

「あー、大丈夫。俺も操祈^みみたいに能力者だからさ、この場を何とかする事くらい朝飯前

だ。そうだな、インデックスが『今ココじやないどこかにいる』みたいなのを言ってくればすぐ終わる、具体的な場所を言ってくれと助かるが」

「うーん、なら『ここじやなくて、今はぶそくの学生マンションにいる』これでいいの?」
「おう。『ここじやなくて、今学生マンションにいる』確率を100%に、それに伴っ『学生マンション以外にいる確率』を0%にする。すこしフワッてするけど気をつけてね」
分数とインデックスが消え、魔術師一人だけが残された。

「えっ?」

インデックスが無事だったり、突然消えたり、キャパシティを大幅に超えていた。

「よつと。おし、うまく行つたな」

無事に上条の部屋がある階の1つ下にやってこれた二人。

「具合悪くないかインデックス?」

「大丈夫なんだよ。ねえぶすう、今のは本当に科学サイドの技術なの?」

「あー、それかあ。後できちんと教えるから待っててくれないか、とりあえず合流してこ

れからの事も決めたいし」

「うん、分かったんだよ。でもちゃんと教えてね」

「あんがとよ。しかし、何でこんなに通路が濡れてんだ？」

ぼやきながら階段を上がり上の階に行く。すると、誰かが人を殴ったような鈍い音がした。

「もう戦闘始まってたかー」

「何をそんなに悠長にしてるんだよ！早く行かなきゃ」

階段を駆け上がり、上条の部屋の方を見る。そこには満身創痍な上条と、おそらく殴られて意識を失っている赤毛の魔術師、そして背中に傷があり血塗れのインデックスがいた。

「大丈夫？とうま？」

「えっ!? インデックス？お前、やられたんじや？」

「何を言つて……、うわああああ!!! 私が倒れてるんだよおおお!!!」

「どうゆうことだ？ インデックスが二人？ 実は姉妹だった？ それともクローンか？」

ああーもう、上条さんには何がなんだかさっぱりですよ!!!」

二人が漫才をやっている中こんな状況を作った本人である分数が言葉を漏らした。

「ヤバッ、忘れてた……」

後輩思いのとある先輩

インデックスと上条が分数がやらかした事を問い詰めようとしたが、インデックスが人払いの魔術が解けていることに気づき、またスプリンクラーが作動したことによって消防車や野次馬が増えてきたので場所を移してから問い詰めることとなった。そして今彼らは、とある先生のアパートに来ていた。

「だからって、どうして先生の所に来るんですか!!」

月詠小萌。二人の通う高校の教師であり、上条の担任だ。学園都市の七不思議に指定されるほどの幼女先生。

「言ってるじゃないですか、小萌先生しか頼れる人がいないんですよ」

「そんなこと言われたって、先生にも事情っていうものがあるんですよ……」

生徒を大切に思うからこそ、生徒に頼まれた時は強く断れなかった。そこに分数が畳み掛ける。先ほど立ち寄ったスーパールの袋を見せる。

「ここに豪華絢爛焼き肉セットが有ります」

「仕方ないですね分数ちゃんは今回だけですよ」

「落ちたな」

「これってズルじゃないの？ねえとうま」

「小萌先生ええ」

分数の見事な策略によって寝床を確保した三人であった。

小萌が飲み物（主にお酒）を買ってくるのと家を出て、残った三人はちゃぶ台を囲むように座っている。

「まずどつから説明したらいいのかな？……血まみれのインデックスのことからがいいか」

分数の言った言葉に二人が頷く。

「あの倒れてたインデックスは人形だ。インデックスが寝てる間に知り合いの『人形制作』と『衣服制作』の二人に頼んだんだ」

「どーるめいかー？どれすめいかー？」

「それも能力なのかな？」

分数の言った能力の意味がわからなく困惑する上条と、それを科学側の技術か確認するインデックス。

「そうだ。さつき言った能力はキッチンとこちらのノウハウだけを使った物だ。つてか当

麻おまえ、これくらい英語は分かるだろうがアホか!!……アホだったな」

紙に能力名を書いて説明する。それを見て上条は納得した。

「人形制作はそいつが見た人そのままの人形を作ることが出来る。そしてその後、そいつに決められたルートを歩かせることが出来る。まあ着るものがないから、衣服制作に歩く教会を雰囲気で作ってもらった、って訳だ」

「ぶそくはソレを忘れてたってことだよな?」

「……はい」

「先輩はやる時はやるのに偶に抜けてる時あるからなあ」

せつかく色々細工をしていたのに、食蜂とインデックスとの買い物を楽しすぎて忘れていた分数は年下二人に呆れられてしまった。

「ま、まあその話はもういいだろう。時間的に次の話に移らなければならぬし」

「逃げたな」

「逃げたんだよ」

「うるせえよ!!で、次の話だが。インデックスは俺の『確率操作』について気になるんだよな」

「そうなんだよ!!それは何なのか、それを教えてほしいの」

うーん、と唸り腕を組み少し考える。そして考えがまとまったのか、まずは上条に話

しかける。

「当麻、まずは俺の能力について知ってることを言ってみろ。お前の面倒を見てやった先輩の能力なんだ、わかるだろ?」

「…前に説明してもらったけど。あれだろ? 『あらゆる事象の起こる確率を自由に変えられる』だっけ」

「そこに『目の前の人が言った』をつければ完璧だがな。あとは『事象が起こる確率が分かる』もあるけど。そんなところさ」

一呼吸を入れる。

「でもインデックスが聞きたいのはそんな些細なことじゃないんだろ?」

「えっ!?!」

「うん。私が聞きたいのはどうやってそれを起こしているのか」

その質問の意味がわからない上条は尋ねる。

「どういう事だインデックス」

「ぶそくが能力を使うと少しだけ魔力の発生を感じるの」

「つ、つまりは、分数先輩は能力者じゃ無くて魔術師ってことになるのか?」

「ううん、それも違うよとうま。私が感じたのはほんの少しだけ、あれだけの事象の改変をするなら魔術師が一生かけて得られる魔力がなきや出来ないの」

「大筋は合ってるな。流石は10万3000冊の魔導書を持つてると言ったところかな。うん、その通りだよ。俺の能力には魔術的要素が含まれている」

「私も言ってると思ったんだけど、それはおかしいんだよ!!能力者に魔術は使えない、だってそんなことをしたら……」

「能力者、つまりは科学側の技術で能力開発をされた人だ。でもな、俺は一度も能力開発をされていいない」

沈黙が生じる。

「あれ?わかんなかった?俺は能力開発を——

「ただいまです!!」

「小萌先生来たからまた今度詳しく話す。小萌せんせい、手伝いますね」

疑問を残す二人を置いてけぼりにして夜はふけていった。

翌日、魔術師との戦闘や初めてばかりの経験をたくさんしたなどと様々な理由で熟睡している上条とインデックスを寝せたままにして早いうちに小萌のサポートを出た。そして彼が向かった先は風紀委員第177支部だった。

「それで俺がいない間に何か進展はあったか?」

すでに日は落ち始め、ほとんどがパトロールに行っていたためその場には分数と初春しかいなかった。

「昨日、木山春生さんという方とお話して捜査に協力してもらえることになりましたよ」
パソコンを操作しながら返事をする。

「ふーん。なるほどな。ということは、黒子は今パトロールしつつその事件を追っているわけか。大丈夫かな？」

「きつと大丈夫ですよ。白井さん、この半年でぐんぐん成長してますから」

「たしかに肉體戦もこなせるようになって確実に成長はしているが……」
「気になることがあるんですか？」

「幻想御手を使った奴らは能力が向上するだろ？つてことは調子に乗って普通じゃ考えられない事をしでかすと思うんだよ。それに黒子が反応できるかどうか」

分数が言い終わると支部内の電話が鳴った。その電話を初春がとる。

「はいこちら、風紀委員177支部です!!」

『初春ですわね！今幻想御手の使用者を発見しましたの、これから逮捕をしますわ。よろしければ誰かを送ってもらえませんこと？』

黒子がそれだけを言うと電話が切られた。

「今のは黒子か？なんて言ってた？」

「幻想御手の使用者を発見したらしく、これから捕まえるそうです。それで、誰か手伝いがほしいらしいです」

その言葉を聞くと分数は少し考え口を開いた。

「しゃーないか、俺が行く」

「けど、場所は分かりませんよ」

「黒子は言ってなかったのかよ…。まあ、それでも俺の能力があれば何とかなるだろう。こんな感じでは使いたくないがそうは言ってはいられないだろう」

「では行きますよ『分数さんが白井さんの近くにいない』なんてことは」

「『俺が黒子の近くにいない確率』なんて0%だ!!!」

分数の姿が第177支部から消えた。

一人悩むとある少女

白井の所に転移した分数だったが、周りには今にも崩れそうなほどポロポロなビルがあり、その前で数人が倒れていた。分数は倒れている人達に近づいた。

「もしもし、風紀委員です。ウチの後輩がここにいますと思うんだけどなにか知ってる?」

しかし返事はない。うつ伏せに倒れている人の頭を掴み持ち上げる。

「おいおい。ちゃんと意識があるなら答えろよな? テメエらみたいな、ただ力を手に入れて粹がつてる奴らを傷めつける位なら俺はやるぜ?」

それでも返事はない。するとそのまま頭をさらに持ち上げ腹部に蹴りを入れる。

「ヴグッ!!」

「おはようございまーす。目が覚めたか? まだ覚めてないかはもう一発いつとく?」

先ほどの蹴りの恐怖からか首を力強く横に振る。

「そうか。ならここで起こってることを教えてくれるよ」

他の倒れている人たちも強く頷き、説明を始めた。

「なるほどね、お前らのリーダーと黒子がこのボロ屋の中で戦闘中と」

——しかしこのまま助けに行っても良いものなのか？ここは黒子一人にやらせてみるのも良いかもしれない。あいつの性格上これから様々なことに首を突っ込むだろうし、こういう経験も必要か。それに、一回痛い目見ないと分からないこともあるだろうし。

そう思いくつかの『確率』を観測^{見て}する。

——『この戦闘で黒子が勝つ』確率が約6割か、中々手強いな。『黒子が怪我をする』確率が9割って、これは避けられないだろう。というか、もう怪我をしてそうだ。

などと色々考えているとビルが崩れ始めた。急いで演算をし、移動する。するとそこへ白井が現れる。そんな彼女を優しく抱きかかえる。

「ぶ、分数さん？どうして……ここにおりますの？」

「どうしてって、可愛い後輩が頑張ってるのを見守るのが先輩ってもんだ。てか、お前にしては随分と弱々しい声じゃねーか」

「そんなことありませんわ」

「強がらなくて良いさ、今は休め。後処理は先輩に任せとけて」

「ふふふ、それではお言葉に甘えさせていただきますわ」

そう言い残し白井は意識を手放した。分数は初春に連絡をし、警備員や救急車を呼ぶように伝えた。そしてやってきた救急車と医者により白井を預け警備員に事情を伝えた。

「さーと、続けて後輩のために頑張りますかね」
そう呟いて、次の目的地へと歩き出した。

ブランコや滑り台などどこにでもあるような遊具がある、どこにでもあるとある公園で二人は出会った。

「ようやく来たね。いやー、もしかして読み間違えちゃったかと思ったよ」
分数の視線の先にいたのは。

「どうして私がここに來るってわかったんですかねえ。分数さんに読まれないようにしたつもりだってんですけどね」

気まずそうに顔をかく佐天だった。

「俺の能力にそんな対応は出来ないさ。それを含めて確率を観測するからな。まあいい、こっちに來いよ」

言われたとおり、分数が座っていたベンチに佐天も座る。

「俺がここで待ってた理由がわかるか？」

「…わかりません」

「おいおい、嘘は

「わかりません!!」

言葉を遮って、大きな声を出す。

「つ！すみません、私」

「いいさいいさ。逆に声を荒らげる涙子が見れてよかつたさ、いつもと違う後輩が知れて俺は嬉しいよ」

「素晴らしい、佐天の頭を撫でる。」

「さて」

数分経った頃、本題に入ろうとしていた。

「涙子、超電磁砲に何か言われたか」

体をビクツとさせるが佐天は何も言わない

「沈黙は肯定と捉えるぞ。ここからは俺の勝手な思い込みだ、能力も使っていない。お前は幻想御手を手に入れた、噂好きの涙子だったらいつか見つけるだろうと思ってたしな。でも使う勇気が出なかった。そんな時だ、お前は超電磁砲に会った、会ってしまっただ。そこでレベルの話になったの。それでアイツはこう言った『私は努力してレベル1からレベル5になったの』、そして続けざまに『レベルなんて関係ないじゃない』と。どうだ、合ってるか?」

「はい、合ってます…」

「その言葉を聞いて涙子はこう思ったはずだ『これは勝者能力者の気持ちだ、私達敗者無能力者の気持ちなんてこれっぽちも分かっていない』と」

「……」

「そんな涙子の考えたことは間違っていない」

「えっ?」

思ってもいなかった言葉に疑問を問いかける。

「あいつには俺達の気持ちなんて分からないのさ。元からレベル1で学園都市に来て、壊されない程度に安全な実験を日常生活に組み込まれてきたあいつにとつては、努力すればレベルが上がるもんだと思ってるのさ。自分じや何にもしない癖にな」

「あのっ! 『俺達』 って」

「あーそれか。言葉の綾さ、ただ俺も昔は無能力者だったって訳。それは置いて、それでお前は どうするんだ? 幻想御手 それを使うのか、使わないのか」

佐天は音楽プレイヤーを取り出し、見つめ考える。

「もし、もしもですよ」

考えを出した佐天が口を開く。

「使うと言ったらどうしますか?」

「俺は止めもしないし怒りもしないさ。それが佐天の決めた事なら、ただ後ろから支え

「やるだけさ」

「分かりました、ありがとうございます」

「でもね」

分数の雰囲気が変わる。佐天の目には優しくなった先輩が何かよく分からない恐ろしい物に見えた。

「そうやってズルをして手に入れた力で何か起こしたら、俺はそれを全力で止める。それに、この経験をこれから生かさなければ俺はお前と縁を切るかもしれない。ただそれだけだ」

じゃーなと言って佐天から離れる分数。

「一つ、最後に一つ質問いいですか？」

「何だ？」

「どうして御坂さんの事は名前前で呼ばないんですか？私や初春、それに白井さんも名前を読んでるのに」

「なあに、ただ嫌いなだけさ。自分一人でもここまで登り詰めたと勘違いをしている『超電磁砲』がさ。自分だけの現実の確立を優先して、中身がガキのままの高性能者達がな」

そう言い残し公園から去っていく。一人公園に残された佐天は音楽プレイヤーを強く握りしめた。

とある一休み

とある学区のとある場所に大きな地下街がある。外部との通信が出来ないような材質で作られたその街には約10000人の人が住んでいた。またその殆どが同じ顔をしている。その半数は顔だけでなく、髪も体型もほとんどが同じだった。しかし、残りの5000人は前者と顔しか似ていない。髪型も髪色も、服のセンスも、そしてスタイルまでもが違っていた。そう、それぞれが個性を持っていたのである。この街の代表が信頼できる知り合いや研究者、医者を通して彼女らと話をさせる。様々な事を知った彼女たちは自分という確かな存在を確立させていった。最初の頃は人が少なかつたが、今では様々な店が立ち並び大いに賑わっている。まあ、傍から見たら同じ顔の人が店員とお客なのでおかしなところはあるのだが。

この街を作り上げた代表は日中は代表代理に仕事を任せ地上でごく普通に生活をしているが、一日に一回は必ずここを訪れ現状を確認したり、その日あった出来事を話して聞かせている。そして今は、代表室で代表代理と話をしていた。口にタバコ状のお菓子を啣え、脚を組み豪華な机に脚をあげていた。

「…というのが今日ここで起きた出来事です。なにか質問はありますか、とミサカ1号

は代表に問いかけます」

彼女はこの街の一人目の住人だ。本来ならば彼女よりナンバリングの若い娘が一人目になるはずだったが、準備が必要だという話になり、初めに彼女がこの街にやってきたのだ。そして、ミサカ1号に質問をされた代表はシガレットを噛み砕きため息を吐く。

「なー1号ちゃんよー、こんな格好する必要あるか？」

黒いサングラスに真つ黒なコート、髪を全て上げいかにもと言った悪役である。

「ミサカたちが聞いた話では、裏で大きな計画を企てる人はみなそのような格好をすると聞きました、別にミサカたちはあなたのそんな姿が見たかったわけじゃないのよ、とツンデレ風に答えます」

「考えてる事がただ漏れだし、ちよつと頬を染めた程度じゃ惚れもしねえよ。ああ、もうやめだやめ、かたつ苦しいのは苦手だ」

「ま、待つてください。ミサカは妹達にあなたのその姿の写真を撮ると約束してしまつたのです。脱ぐのはそれからにして下さい、と止めようとしても細身のあなたに押し負けられながら静止を呼びかけます!!」

「分かつたわかつた、泣きそうな顔をなるなよ。罪悪感が生まれちまう」

そして沓々写真を撮られる。

「ふう、これでミサカの威厳が保たれます、とミサカはほっと一息を吐きます」

「ここでは一番古参だしな。俺としては日々成長しているお前らを知るのが好きだし、その中で最も成長してるのがお前だしな。ほんっと、お前を実験室からここに移してからの一週間は大変だった」

「その話はもうしないでください、ミサカにも羞恥心というものがあるんですから、とミサカは赤面しながら答えます」

「今回はちゃんとツンデレの時よりは頬が赤くなってるよ」

「今日は街の方には行かれないのですか？とミサカは尋ねます」

「ん。すでに日が昇っちゃまってるし、今日は何か色々ありそうな気がするからな。今度来るときはちゃんと街を回るから許してくれて伝えてくれ」

「はい、とミサカはあなたの頼みごとを全力で行うことをここに宣言します!!」

代表室を出て廊下を進み、エレベーターを使って地上に出る。

代表が携帯を見ると、留守番電話が入っていた。携帯を操作して留守番電話を聞く。

『分數さん!!!佐天さんが幻想御手を使って倒れてしまいました!!私、佐天さんのためにこの事件を絶対に解決してみせます!!これから、木山さんと会ってお話をするつもり

です。なにか分かったら連絡するので、支部にいるかいつもでも電話に出れるようにしてください!!あと最後に佐天さんが『ごめんなさい』と言ってました。ではまた後で!!!』

代表、木原分数はそれを聞いて独り言ちる。

「涙子が倒れたつてことは他の3人もより本格的に解決に向けて活動するんだらうな。黒子はこの前の戦闘で怪我しちまったから無理だとして。確かそろそろ脳波解析の結果が出て木山が真犯人だつて分かるだらうし、とりあえず超電磁砲はそのまま木山のところに向かうだらうな。問題は飾利が木山が犯人だつて気付くかだよな、もしそれに気付いたらアイツは木山にそれを確かめるだらうし。それで、木山によつて連れていかれるだらう。そこで超電磁砲も合流つて感じかな。気付かなかつたら気づかなかつたできつと木山がなんかしそっだしな。んー、そうやつて考えると木山はとことん運がついてないな」

とりあえず支部に向かうことにした。

「でも、もう今回の目的は達成したからいいかな。今は次の行動に向けて休んどいてくれ。俺が伝えた確率が僅かなものでも、それでもその結果を掴み取るといったアナタの覚悟を無駄にしないためにな」

とある異界の幻想猛獣

支部に向かって歩いていく途中に白井から連絡をもらった木原は、先日白井のところに行ったように能力を使って初春の所に移動した。道路はボロボロとなり、高架の下では御坂と木山の戦いがちようど終わっていた。木原は初春を探すことにした。

「かーぎーりー、どこだーりー!!先輩が迎えに来てやったぞ」

その場の雰囲気合わない発言をする。すると、高架下の木山に異変が生じたのか、頭を押さえて苦しんでいる。次の瞬間、木山から胎児のような謎の生命体が生じる。

「あーあ、起きちゃったか。飾利を探す前にまずはあつちの処理だな、大きくなる前にやっとなないと大変なことになるし」

初春探しから下に降りる階段探しへと変えることにした分数、その彼は疑うべき光景を目にした。

「まじかよ……」

御坂が謎の生命体、AIMバースト幻想猛獣に電撃を放ったのだ。受けた傷を治すべく幻想御手使用者からのAIM拡散力場を吸収する。しかし生まれたばかりの幻想猛獣には加減が分からず、必要以上のAIM拡散力場を吸収してしまう。またAIM拡散力場と共に感情

も吸い上げたため制御が効かず暴走し始めた。

「あのバカ中学生、なに知らない奴に攻撃しかけてんだよ。まずっ、止めないと!!!」

目の前の動けない警備員に向かって幻想猛獣が攻撃を振るう。その間に体を入れ、手でそつと撫でる。それだけで幻想猛獣の触手が上に反れ、被害は出なかった。

「分数じゃん。こんなところにどうしたじゃん?」

分数が助けたのはボロボロになった黄泉川愛穂だった。分数の通うとある高校で教師をしており、風紀委員と警備員という事で交流があった。

「風紀委員本部からのお達しでこの騒動を収めに来たんですが、なんかまた新たな敵が出てきちゃいましたね」

「そいつの事なんだが、どうしてお前はその触手を反らしたじゃん? お前の能力じゃできないじゃん」

「俺が色んな研究をしているのは知ってますよね。その研究の中で同じようなことをやってたんで。つと、ここまで来れば一安心ですかね」

黄泉川に肩を貸し遠くまで移動しながら、嘘を告げる。

「つて事で俺は一旦下に下りますが、すぐ戻ってくるので安心してください」

「待っじゃない! 分数!」

「待たないじゃん!! 愛穂せんせい」

静止している幻想猛獣に飛びかかる、それに反応していくつもの触手が飛んでくるが、全てを先ほどと同じように反らす。

——キチンと俺の力が効いてるな。ミサカネットワークに真似て作られてるから、少し性質が混ざったものかと思つたが純度100%『虚数学区・五行機関』の物だ。やっぱり脳波だけでこれを創りだすのは困難だな、感情が乗つちまつてこちらの意思通りに動いてくれない。まあ、そうやってこちらの手から離れた時ように俺がいるんだがな。

触手を上手く活用し下まで降りると、先ほどの二人の他に初春もいた。どうやら三人共何をすべきか考えて行動しようとしていたところに分数が到着した形になる。

「よーつす三人共。げんき？」

「ふふ。相変わらず君は空気が読めてるんだか、読めてないんだかその場に合わない事をするな」

「分数!!」「分数さん!!」

「まあまあこんな時だから挨拶は良いからさ、お前らやる事が有るんだろ？それに取り掛かれよ」

その言葉を聞いて御坂は幻想猛獣の元へ向かい、初春は上に向かった。分数はと言えば、木山に肩を貸そうとしていた。

「ん？なんだね？」

「見りや分かるでしよ、肩を貸そうと思ったんだが。下にいても危険なだけだし、飾利が上に行く際に触手に襲われないようにしたいし」

「そうだったか、貸してもらおうよ」

木山は立ち上がり、分数とともに階段へ向かう。そんな二人に気づいてか初春は階段と前で止まっていた。

「飾利！俺達の事は良いから先に行け！そのプログラムを流さなきゃアレはとまらねえからな!!」

その言葉に頷き階段を登る。その時だ、数本の触手が初春へと向かう。初春は背を向け、プログラムが入ったメモリをかばうように屈む。

しかし、衝撃は来なかった。初春は恐る恐る振り向くと、触手が全て止まっていた。何故かは分からなかったが助かったと思い、急いで上へ行く。

「君の能力は『確率を観測し変化させる』ものじゃなかったか？」

「そうですが？だから『飾利に向かっていった触手が行動をする確率』を失くしました。ああ、どうして誰も言っていないのにそれが出来たんだ、とか思ってる顔ですね。それは企業秘密なので教えてあげられませんよ？もし聞きたいならば、俺がすでに準備してあるアナタの収容期間を短くする手続きを破棄する事と交換で教えますが」

「いやいい、(´▽｀)まで来て最後の機会を失うわけには行かないさ」

「良かったです、これでアナタが交換で聞いてきたら俺は失望していたでしょうしね」
いくつか初春に襲いかかってきた触手を止めながら木原と木山は上に辿り着いた。それと同時に解除プログラムが流れ幻想猛獣は弱体化され、御坂によつて倒された。今回の出来事で得を得たのは、ようやく能力を使うという感覚を手に入れられた無能力者と目的を達成でき次のための布石を張ることが出来た木山、そしてプランの短縮が出来たと笑う木山とアレイスターだった。

とある魔術の木原分数

無事に幻想御手事件は解決を迎えた。木山の身柄を警備員に預ける。その際に木山が御坂に『妹達』に繋がるような内容を行った時は内心焦ったが、まわりの人にはばれていなかった。数人の負傷した警備員と一応の検査が必要という事で初春が救急車によつて病人に運び込まれることとなった。警備員も撤退し、その場には二人しか残っていないかった。

「ねえあんた、木山と知り合いだったの？」

ふと御坂が木原に問いかける。先を歩く木原は振り返らずに答える。

「そうだが？どうかしたか超電磁砲」

「いや、あんたがああ的事を知ってるのか知りたくて…」

ああ、知ってたぞ。というか今回の幻想御手の制作には俺も関わったし、実際の制作者は俺と木山だしな」

「ああ、知ってたぞ。というか今回の幻想御手の制作には俺も関わったし、実際の制作者は俺と木山だしな」

今回の木山の逮捕は『公共施設の破壊』が原因となっており、幻想御手は全く関係が

ないのだ。

「そう言い終えると木原の体がぐるりと回った。ベルトのバックルなどの金属を能力によつて基点とされ御坂によつて行われた。胸ぐらを掴まれる。

「あんた、それでどれだけの人が苦しんだと思つてるの!!」

御坂が睨み、声を張り上げる。しかし木原は依然として態度を変えない。

「何を言つてるんだ超電磁砲。俺は制作しただけ、木山はそれをばらまいただけ、つまり使つた奴の自己責任だ」

「そんなの言い訳に過ぎないわ!!」

感情が昂ぶり、漏電している。

「大体そんな『音楽を聞くだけで能力が上がる』なんて甘い話に裏がないわけが無いだろうが。そこら辺がわからない奴は屑なんだ。しかし、使用者の中にはそれでもいいから能力を一度は使つてみたくてどうしようもない人だつていたのは事実だ。わざわざ学園都市まで来たのに、なんの能力もありませんつて事は誇れる事じゃない、むしろ逆だ。そういう感情は高能力者、特に超電磁砲レベルになると全く分からないものだ。勝手が勝手に敗者の気持ち語るんじゃないやねえ!勝手に理解してる風に話すんじゃないやねえ!そんな所だろう。つと、一応 teme じゃなくて俺の後輩の為のフォロー何だが、涙子は少なくともさつきみたいな感情は持つてないさ、アイツはお前たちに憧れてたのさ、私もあ

あなりたい、皆の役に立ちたい、その一心で幻想御手を使ったのさ。その気持ちと今回の能力を使った経験があれば近いうちに能力者になれるとは思うがな。それじゃ俺はこのまま風紀委員本部に行くからな、じゃーな超電磁砲」

木原の姿が消える。残された御坂は木原の言葉を受け止めることで精一杯だった。

日がすっかり落ちた頃、木山は数日ぶりに小萌先生の元に行つてインデックスに会いに行こうと思つていた。と言つても、木原はほぼ毎日の様にメールをしているし、一回は電話をした。話を見て、聞く限りどうやら当麻とインデックスの関係が深まり、インデックスが当麻の事を意識している様にも思えると言つのが彼の感想である。それを食蜂に話したところ、親が娘に抱く感情と一緒に言われてしまった。

そんな彼はインデックスとのメールで銭湯に行ったという事を知つたので、迎えに行こうとしている。いつものようにビル群歩く。無意識の内に右に曲がろうとした体を無理矢理正面に戻す。するとその瞬間、目の前で殺気が爆発したのを感じる。それでもいつもと同じように歩いて行くと、ぼろぼろになつた上条とこの前あつた魔術師に気がついた。

「おいおい、なにやられちゃつてるんだよ当麻くんよ。そんなんじゃ可愛らしいお姫様インデックス

を守る騎士ナイトに何か成れっこ無いぜ」

その発言に上条は反応することはなく、木原は気絶していると分かった。そして魔術師はいきなり現れた声の主を見て驚く。

「いつからそこにいたのですか。確かあなたの能力ではそこまでの事を単体で出来る筈が無いのですが」

「そう簡単に教えるわけが無いだろうが。つーか、テメエの方こそどこの誰だよ。人の事を勝手に調べたんだそれくらいのことには教えてくれるだろうな？」

「イギリス清教ネセサリウス必要悪の教会所属の神裂火織です」

「俺のことは知ってると思うが木原分数だ。一応大能力者なんて呼ばれてはいるが、おそらくテメエとの戦闘ではコレはやくにたたないだろうな聖人」

「ほう、私が聖人であることを知っているのですか」

「そりゃ、こつちには魔術のスペシャリストがいるからな。知識だけに関してだけどき」
聖人とは、世界に20人といないとされる、生まれた時から神の子に似た身体的特徴・魔術的記号を持つ人間の事だ。偶像の理論により、『神の力の一端』をその身に宿すことができ、聖人の証『聖痕』（ステイグマ）を開放した場合に限り、一時的に人間を超えた力を使うことができる。

「一応俺として、テメエに負けたクソほどにも可愛くない後輩の敵を討たなきゃいけない

「いんだが、そっちの覚悟はいいか？」

「この男のためですか。インデックスのことはいいのですか？」

「わすれてた」

沈黙が生じる。

「ん、ん、言い直しますよ。俺はこのクソと可愛らしいインデックスの為にテメエを倒す。てめえが倒れたらどうしてお前らがこんなことをしているのかを聞く、てめえか勝つたら何でも聞いてやらあ。インデックスを返せ、だろ？が何だろ？がな」

「随分威勢が良いですね。まるで自分は負けないとも思っているみたいですが」
「俺は勝ち目無い勝負はしないつもりだ。さーてーと、始めますか」

神裂は腰の刀に手を添える、木原はポケットに手を入れそこに突っ立っているだけ。

「いくぞ魔術師、運命は我が手に fatum000」

木原が魔法名を言い、戦いの火蓋が落とされた。

とある確率好きの少年

能力者である木原が魔法名を言ったことに驚きはしたものの、すぐに思考を切り替えて迎撃に移行した。

——七閃

心の中で呟きにウエスタンベルトの長刀、七天七刀に手を添える。そして一瞬の内に抜刀・納刀をし七つもの斬撃を放つ。とはいっても実際は、刀を鞘内で僅かにずらす動作の影で七本の鋼糸を操っているだけに過ぎない。その斬撃を半歩動くことによつて全てをかわす。

「おいおい魔術師、どうして魔術を使わない？俺にとつちやただの物理攻撃の方が数倍恐ろしんだけどな」

何故バレたという疑問がよぎる。彼は只の確率を観測し操作するだけでは無かったのか。

「生憎と俺は自分から攻撃は出来ないんだ、俺のチカラはそつち方面じゃないからな」

いくら七閃を放つても当たらないため、攻撃方法を変える。攻撃に使っていた七本の鋼糸を身体強化の魔法陣の為の支援に変更し、聖痕を開放し更に肉体を強化させる。そ

れにより木原に弾丸の様に、弾丸以上の速さで近づく。それを見て木原は笑う。

「はっはー、話聞いてなかったのか？魔術を使ったら更に勝ち筋が無くなるぜ」

カウンター気味に神埼の腹部がやって来るところに拳を添えるだけ、音速に近い速さでやって来た神裂は彼の行動など気にしない。聖人である神裂は肉体的に強化されているため、常人が素手で攻撃しても攻撃したほうがダメージを負うのだ。それが普通だ。しかしこの場合ダメージを受けたのは神裂だった。並々ならない衝撃が生じ逆方向へ飛んでいく。ビルの壁にぶつかり息を漏らす。

「どうして私がダメージを？それより聖人の肉体強化は？とも考えているのかなあ。その次は目の前の敵の能力が聞いていた話と違うって考えてるよな」

神裂は何も答えない、答えられない。肉体がいう事を効かない。

「あんたらが知ってる俺の能力は、俺が科学側を騙すために作ったものさ。ああ、これから言うことは所詮いう事のない事だが、お前に知らせておくことで後々楽になれば良いなど思ってるからだ」

先ほどまで孕んでいた殺気は何のその、雑談する程の軽い雰囲気を纏っている。

「俺が事象を他人に言ってもらはないと確率を操作できないってのは半分正解で半分不正解さ。それが必要となるのは科学的な事象の時だけさ。言い方を変えれば魔術的でない時だ。移動然り、勝敗然り、ここでの事象はほとんど科学的になっちまう。だが、魔

術師との戦闘になりやー違う。最初のワイヤーは別として、あんたの使ったワイヤーの魔法陣や聖人の肉体強化も全て『効果が現れる』確率を零にした。その上で『この場が昔聖人を処刑された場所と同じ』なんて言う零の確率を逆にした。ただそれだけ、俺にできるのは『魔術的事象の確率』を変えただけ」

「しかし…それだけでは説明が付きません。…：魔術はそこまで、万能では有りません。魔力も膨大な量、がかります。…：さらには、『確率操作』の方は説明がついても、『確率観測』の方は説明されません…」

ようやく喋れるようになり、息を切らしながらも意見を述べる。

「まずはあんた等本物の魔術師と俺は違うことを前提としなければならぬ。俺の力は『科学を基本とし魔術によって現れる』物だ。『確率観測』は全て科学によるものだ」

「しかし！能力者に魔術は使えません!!」

「能力者の定義を知ってるか？能力者は『この街で能力開発を受けた』奴のことを指す。しかし、俺がしたのは只の『科学』その気になれば外の技術で出来るほどのものさ」

顔を神裂に近づけてゆく。

「俺が最も得意なのは『確率』だ。その時俺が気づいたのさ、確率を求めるときにはどんな条件下ならその事象が起きるか、噛み砕くとどこが原因で起きたり起きなかつたりするかだ。それを調べるには能力開発なんて物は要らないんだよ」

ビルの影から出て月の光を浴びる。両手を広げて二ヒルな笑みを浮かべる。

「知ってるか？この世の全ての事柄は法則や式によつて表すことができる。そして、その式自体は既に見つかっている。それらをすべて覚え、自ら計算することで自らの力で条件を探し、確率を求めることが出来る」

「全ての式を覚えるなんてそんな…」

「そんなわけあるだろ。お前らが追つてるインデックスだつて一回見たものは忘れな
い。まあ、俺の場合は一回覚えたらなんだがそこまで気にする事ではない。それくらい
の科学なら能力開発にはなら無い。ついでに処理の方も弄ることであらゆる物を法則
や式に当てはめて見ることが出来る。それから得た情報を使って大抵の確率を知るこ
とができるのさ。気温、湿度、天気、その人の体調や周りの人の感情とか色んな事を元
に、あとは先の事だった場合はその人の心を掌握することで確率を確かな物にしてい
く。知り合いに能力でそれができる奴と技術でそれができる奴がいるからすぐに身に
つけられたさ」

心理学に関しては二人のエキスパートを知っている木原。どちらも巨乳の後輩と
同級生のことだ。

「そしてそうやって導き出された『事象の確率』を魔術で変えてやるのさ。やることは簡
単だ、俺に見える法則や式を俺のさじ加減で変える。だからこそそんなに魔力もいらな

いし、すぐ出来る。欠点は魔術にしか効かないことだな、科学に適応させるには誰かの補助が必要になるし、いちいち言語化しなけりやならん」

自らの能力の事をあらかた話し終えた木原は、

科学と魔術を融合させちまつた異端者をお前は捕まえることも倒すことも出来なかつた。そうするとお前は帰つたあと上司に伝えるだろ、すると色々な奴が俺の元に来るだろう。それは流石に面倒くさい。だから俺はあんたに一つ提案したい事がある。なあに、ここまで手の内を明かしといて裏切つたりはしないさ。…そろそろあんたも動けるはずだがどうだ？」

神裂は体を動かす。たしかに聖人としての力が出ないが、体の傷は治っており自由に動ける。そして、次の提案を述べるために自らの魔術を伝えた木原に言う。

「それはどのような提案でしょうか。色々と情報を得ましたが、全てはあなたが勝手に語つたものだ。私はその提案に乗ると決まつたわけではないのに」

「俺の頼みがインデックスに関わることだとしてもか？」

その発言が神裂の表情を変える。

「とある筋から聞いた話だと、インデックスの魔道書の知識が脳の大部分を占めているから一年分しか記憶を蓄えておけないんだっけか。一言で言わせて貰えば、そんな馬鹿馬鹿しいことはない」

「なっ!？」

「脳って言っても記憶を扱う部分や言葉を扱う部分って分かれてる。その時点で脳の大部分を占めているとかの話は嘘だ。それならその記憶を扱う部分の大半を占めているのは？ そう思っただろうが、それもありえない。例としては、インデックスみたいに見たものを忘れない人たちが結構な年齢まで生きてることだ。本を見ようが風景を見ようが記憶される時間は同じなんだ、お前らの考え方だとインデックスみたいな奴らは二桁になる前にパンクして死ぬってことだぞ」

あまりにも衝撃的な事実には神裂は耳を疑う。

——それでは私達が今までしてきたことは全て無駄だったという事なのか。

知らぬ間に涙が流れてくる。

「おいおい泣くなよ、女性を泣かせるのは趣味じゃねえ。ましてや同じ年とならばなおさらだ。ほらこれを使え」

ハンカチを取り出し神裂に渡す。神裂は涙を拭くが拭いても拭いても涙が止まらない。気がつけば声を上げて泣いていた。月が照らす元で、それまでかつての友達を傷つけた事の懺悔かのように彼女は魔術師や聖人としてではなく、ただの18歳の少女として泣いた。

病院のとある1コマ

「ふっふっふ　ふっふっふ　ふっふっふ」

おっふる　おっふる　おっふるー、と幻聴が聞こえそうな鼻歌を歌いながら病院内を分数は歩く。昨日の夜、神裂を何とか慰めたあと、明日改めて話をすることにして分かれた。ここの病院に連絡して救急車を頼み、インデックスに電話をして木原の元に来るように頼んだ。駆けつけて来たインデックスに事情を説明していると、救急車が来たため上条を預ける。見送ったあとはインデックスと小萌の家に向かいつつ、再び事情を話し始めた。もちろん記憶のことや神裂の過去のことは隠したが。

そして今、入院している二人に会うため病院に来ていた。偶然なのか、ちょうどその日は常盤台組はプール掃除を、初春は犯人である木山に連れて行かれたという理由で警備員に事件の詳細を聴かれているため、彼の向かう先では彼の知り合いはちようどいなかった。

とは言っても、彼女がいる病室は複数人の患者もいるため二人つきりというわけではない。彼女がいる病室のドアを横にスライドさせる。彼が病室内を見回す、女子への配慮かこの部屋は同い年の女子しかいなかった。半周を終えたころ目的の少女、佐天涙子

を見つけた。彼女は手元の雑誌に集中しており、木原が来たことに気がついていなかった。

そんな彼女も周りが少し騒がしくなったため集中が切れた。そうして顔を上げると目の前には、幻想御手を使うかどうかを相談した先輩がいた。口調はともかく見た目は整っているためこの様に少し騒がしくなるのもうなずける佐天だったが、もっとも肝心なそんな彼が目の前にいるという事に気が付くには少し時間がかかった。

「…うわっ!!!」

拍子抜けした声を出し驚く。そんな彼女に木原は笑った。

「それくらい元気なら心配は要らないかな。少し話したいことがあるんだが、ここだとちっと人が多いし騒がし過ぎるな…。談話室が有るからそこに移ろうか、歩けるか?」
「はいっ!」

元気よく返事をしてスリッパを履き木原の後に続く。エレベーターに乗り込み木原が迷いもなく談話室がある階のボタンを押す。佐天はその事が気になったが、他にも乗客がいるため聞かなかつた。目的の階に到着し、談話室へと歩いて行く。その途中で木原は飲み物を二本買った。この病院の飲み物は学園都市のゲテモノばかりを売っている自販機とは違い、大抵の皆が好き好んでいるものを売っている。それでも、ゲテモノ専用の自販機もあったりするが。そうして談話室の前についたが生憎と談話室は埋

まっていた。

「そりやそうか、俺達みたいにはなししたい奴らは結構いるし、ここだと数人で話せるしな。屋上に変えるがいいか？」

「私は大丈夫ですよ」

木原の質問に笑顔で答える佐天。再びエレベーターに乗り屋上へ行く。そこには数個のベンチが置かれており、人は一人もいなかった。

「ここなら話せるな。こっち来いよ」

「ふふふ、前に公園でも同じこと言われましたよ」

笑顔で木原の隣に座る佐天。その表情は前と違い明るかった。木原は佐天に飲み物を渡す。

「……」

「……」

沈黙が生じる。

「どうしたんですか分数さん、いつもはいっぱいお話したり、私を質問攻めにするのに」
明るく語る佐天に対し口を開く。

「それじゃお望み通り質問攻めにしてあげますか。あらかじめ言っておくが俺は涙子を責めるつもりはない」

優しげな口調で言う。

「それでどうだった？少しズルをしたが能力者に成れた気分は」

「それはもう世界が変わりましたよ！今まで見ていた景色が全く違うものになつて、今までの私って何だったんだらうって」

「ありきたりな質問になるが後悔はしてるか？」

「後悔は……してないと言えば嘘になりますね。初春や白井さんたちに悪いことをしちゃつたな〜と。でもですね、やつて良かったとは思つてゐるんです。みんなと同じ目線に立てて嬉しかつたんですから」

「それは良かった」

そう呟いて飲み物を飲む。佐天にはそんな木原が物寂しげに見えていた。

「涙子の能力ってなんだつたんだ？」

「友達が言うには風力操作エアロハンドらしいです。こうやつて手を出して待つてると手のひらで氣流が出来てました」

今は出ませんですけどね、佐天は笑いながら言った。

「らしいって事は涙子はそうは思つてないのか？」

「はい。私も幻想御手を使つていた時はそうなのかと思つてたんですけど、昨日目覚めてから少し違うことに気がついたんですよ」

「ほーう」

「私と同じく幻想御手を使って入院している人からは何かを感じることが出来るんですけど、看護師さんやお医者さん、そして今思ったんですけど分数さんからも感じられないですね。分数さん分かりますか？」

「A I M 拡散力場の観測及び干渉か」

小さな眩きだった佐天の耳には届いていた。

「A I M : 拡散力場？」

「流石にまだ習っていないか、正式名称はA n | I n v o l u n t a r y | M o v e m e n t 拡散力場。」

『A n | I n v o l u n t a r y | M o v e m e n t』ってのは簡単に言えば『無自覚』ってことだ。能力者が無自覚に発してしまう微弱な力のフィールド全般を指す言葉なんだが」

これはマズイ、木原は思った。学園都市広しと言えど、A I M 拡散力場関連の能力者は少ない。彼の知り合いである滝壺も能力追跡という稀有な能力を持っているがそれ故に暗部に堕ちた。それほどこの街はA I M に関係する能力を欲しているのだ。

「あんいんぼるたりーむーぶめんと？それが私の能力と関係してるんですか？」

「ああ、A I M 拡散力場は能力者が無自覚で作っちゃうものなんだ。そしてそこには超

能力者も無能力者も関係がない」

そういう事だ。その言葉を最後に付け足した。その言葉の意味を佐天は理解している。理解していき一つの疑問を抱いた。

「無能力者もつて事は分数さんは無能力者でも無いってことですか!?!でもつ、たしか大能力者だつて」

言葉を詰まらせる木原。それを語るには随分と深い所まで話さなくてはならない。ただでさえ能力によって危険に晒せれるであろう涙子をこれ以上危険に晒しなくないという思いが生じる。

「そ、それはなだなあ」

故に、どこことなく触りだけを聞かせることにした。佐天の性格上誤魔化すのは無理だと判断したからだ。自分は研究者であること、確率が分かるのはここに来る前からだと、そういう人にはAIM拡散力場が生まれないこと。現実味を帯びらせることでその場を誤魔化する。それに佐天は納得した。というより難しい言葉が多かったり、木原のエキスパート直伝の話術にやられたりしたのだが。

「それでだ、涙子の能力開発を俺にやらせてほしい」

「はい!?!」

突然申し込みに驚く。木原は言葉を続けた。

「涙子のその能力はこの街でも珍しい物だ。だからこそ、科学者たちはどんな道に逸れたことでも研究をしたがる。正直言つて、後輩がそんな目に遭うのは嫌なんだ。俺が開発すると言つてもそんなバンバンやるつもりは無いしな、飾利との遊びや日常生活を犠牲にしなくてもいい。能力に目覚めたからちよつとやってみようみたいなのでいいからさ」

マシガントークを飛ばす木原に佐天は笑つて答えた。

「ふふふ、分数さんの精一杯私を守ろうとする気持ちが出来ました。さっきの話を書いて分数さんならいいかなあつて、でもこんなに簡単に決めちゃつても良いんですか？なんかこう、仰々しい書類とか、私がちゃんと能力者なのかとか」

「涙子が特にやらなきゃいけない事は無いさ。俺がきちんとした手順で学校に連絡するから、それまでは待機でいいよ」

これからの日程を話しつつ、午前の面談時間が終わった。佐天を送り届けたあと、もう一人の知り合いの病室に向かう。その時の彼の表情は「これで犠牲者を減らせた」そんな風にも見えたのだ。

とある少年の

「それじゃ、今から『インデックス☆救出☆大作戦☆』を始めるぞ☆」

彼に良く懐いている後輩の真似をして木原は宣言する。場所は夜中の公園、きちんと近所迷惑にならないようスタイルのルーンでこの場所を区切っているので音漏れの心配はない。

その場にいたのは木原、上条、ステイル、神裂、そしてインデックスだ。インデックスはいつもの修道服ではなくて先日のお買い物で買った寝間着を着ていた。

「俺が『原因』になると大体の予測をしている処を神裂に調べてもらう。それを発見したらそれぞれ準備を完了させ、上条の幻想殺しで消す。もしその時に何かが起こったら一先ずは個人で対処、と言ってもそれを引き起こした上条だけが標的にされる可能性は高いが。そこら辺はまあ頑張れ」

上条が文句を言ってくるが無視して続ける。

「それでも、インデックスに上条が右手で触れればそれで終わりだ。これが一応の決着って事で頑張りましょー」

その場の思い雰囲気に合わない脳天気さでいる。インデックスは「おー」と木原に続

き、ステイルと神裂は顔をしかめ、上条は怪我をしないか心配している。夜空を見上げ木原は思う。

——これでインデックスも救えて、この上のアレも破壊できる。一石二鳥つてことで自分を納得させるかな

時間は数日遡る。

佐天との話のあと同じ病院に入院している上条の病室に向かった彼は、病室の中で気持ちよさそうに寝息をたてる上条と、隣でパイプ椅子に座り眠っているインデックスを見た。そこで木原はインデックスの寝息が上条のものと違い荒いことに気が付いた。近づいてみると、少しだけ魔力を感じた。

——インデックスは魔術が使えないはずじゃ

その事を知っていた木原はこの魔力の発生源を調べようとした。次の瞬間、激しい衝

撃と共に景色が変わった。室内ではなく屋外へ、目を凝らせばようやく上条の病室が見える所だった。後ろを向くと木原を抱えている神裂が、左を見ると双眼鏡で上条の病室を、正確には病室で眠っているインデックスを見ているステイルがいた。これからの事が大体予想できた彼の口からするりと言葉が漏れた。

「眠い、怠い、面倒くさい」

だからといってここまで連れて来られて何もしないのも嫌である。

「神裂に昨日渡したあのファイルの内容を二人共読んだか？」

偶然木山との幻想御手開発で使った脳についての資料を神埼に渡していた。二人の確認が取れたあと、再び口頭で説明した。

「てな感じだ。さっきのインデックスの感じも魔術によるものだと思う。記憶の圧迫であんな風になるかってんだ」

神裂もステイルも下を向く。

「それを解決する手はあるさ」

「それは何だい？」

ステイルが尋ねる。

「そりゃ、これさ」

右手を突き出して答える。しかしその意図が二人には理解されなかった。

「分かんないか。右手だよ右手、当麻の右手を使えば一発だ。まあ、核となる部分をぶつ潰さないと意味はないがな」

「あなたの魔術ではできないのですか!!」

魔術側が科学側に頼るのは些か良くない。しかし木原は、科学側に属しながら魔術側の人間であるから一応はセーフなのだ。

「えっ、ヤダよ」

「どうしてですか!!」

間髪入れずに返答した木原の胸ぐらを神裂は掴んだ。

「俺の魔術を勘違いしてるようだから言うっておくが、俺はその出来事そのものの一つを変えてるわけじゃない。あらゆる物に干渉し確率を弄くるだけだ。ときによっちゃ、過去にまで遡って色々やるんだが」

「それだったら彼女も」

「今回の件に関しては結構過去にまで遡って数値を変えなきゃいけない。その数値を見つげ出すまでに膨大な時間がかかる、数値を変えるのは魔術だが数値を調べるのは自力だ。2日は演算しまくriのはずだ。そして仮にそれがうまくいっても今に影響が出ないようにもしなきゃいけない。さっき変えた数値がもたらす影響すべてを修正し、整えなきゃいけない。俺にそこまでの魔力は無い。まあ諦めて当麻の右手に頼りなさいな」

話を締めくくりビルから去っていった。

そして話は冒頭へと戻る。後日目を覚ました上条とインデックスに事情を説明し、それを行う日になった。

「つて事でとりあえず口の中を調べてみて。こういう意地汚い制御装置つてのは、設置した奴が簡単にいじれる様な所に置くのさ。でも、相手には見つからないとなると体の中でも外気と接するところ。そして、影響を与え大脳に近いとなると口の中だ。どうだ神裂？」

「たしかに有りました!!」

「…恥ずかしいんだよ」

それぞれが戦闘準備をする。木原の目的はインデックスの救済と、遙か上にあるツリーダイアグラムの破壊だ。

とある終焉ととある人物紹介

上条が首輪を破壊した。本来ならば首輪の一部のみしか破壊できないはずだったが、木原の魔術により被害を拡大させ、首輪の全てを破壊した。

首輪が失われたことにより自動書記ヨハネのペンが発動した。インデックスの魔力を全て用いた自動書記は最速で術式を組み、上条に聖セイントジョージの聖域を放った。それはすぐに性質を変え、竜王ドラゴンブレスの殺息ステイルも神裂も反応できない中、木原だけが最も早く反応出来た。自動書記の発動によって吹き飛ばされた上条が勢いに押され倒れそうになる直前に軌道を変えた。聖ジョージの聖域は上にそれ、宇宙空間まで届いた。

この隙に神裂は鋼線を利用し、魔術的に強化したインデックスを拘束し、ステイルは破れた結界を貼り直す。こうして上条はインデックスに近づき自動書記を破壊した。インデックスの力が抜け、インデックスを上条がさささえる。

「その羽に触れてはいけません!!」

神裂が叫ぶ。二人の上には純白の羽が待っていた。竜王の殺息によって生み出された『光の羽』、膨大なエネルギーを持った羽が二人に当たりそうになった。上条はダメーシの性でその場を動けなかった。インデックスに覆いかぶさり、インデックスを護ろう

とする。しかし彼らには降り注がなかった。その代わりにバタリと木原が倒れた音がした。

こうして一つの魔術と科学が交差した物語が終わった。

登場人物説明

木原きはらぶそく分数

人物像

本作の主人公にしてバランスプレーカー。自分がしたい事を常にしており、周りの人間に良く迷惑をかける。基本後輩と女性には優しいが例外がいて、その殆どが高能力者。鈍感ではなく、女心は分かる方。

表ではジャツジメント所属だが、裏では様々な実験に協力しており名の知れた科学者。また、暗部との関わりもありアイテムとは友好的な関係を築いているがスクールとは敵対している。

『木原一族』の一員。とは言っても現在は木原の『落ちこぼれ』であり、木原の誰とも連絡をとっていない。その際に『確率』を司っていた木原数多と師弟関係にあった。分数の読みを『ぶんすう』にした方が良いのか悩んでる。

能力

オプザーバー
確率観測

元から装置などで確率を調べていたが、自らの手で調べたいと思い、能力開発とは言わないが、脳を自ら弄くり回し得た結果。あらゆる法則と式、それによって生じる事象を覚えられ計算も出来るようになった。それに伴い事象から式を逆算出来る。インデックスの完全記憶能力とは異なり、一度覚えた物は決して忘れない。

ギャンブラー
確率操作

確率観測で得た式を魔術によって変えることによつて、事象の確率を変える。ただ式を変えるだけなので、世界そのものを変える魔術だが使う魔力が少ない。よくよくは魔力を別な物に変えたいと考えてる。レベル検査や滝壺を誤魔化すような術式を組み込

んでいるが佐天にはバレた。

作者としては魔術としてよりかは『未来予知』系の方が良かったのかなとは少し思っている。あと、早めにルビを変えたいが案が浮かんで来ない。

上条当麻

史実の主人公。原作と性格は何も変わらない。唯一違うのは、記憶を無くさなかったこと。『主人公』上条当麻ではなく、『偽善使い』フオックスウオード上条当麻として物語が進んでいく。

インデックス

原作よりも少し幼くなった。食蜂や木原によつて電子機器への恐怖が無くなり、日常で困らない程度には使える。食蜂とはメル友。上条に恋心を持たせるかはちやんとは決まっていない。

食蜂操祈

とあるシリーズに多い金髪巨乳の一人。木原とは外装代脳エクステリアの際に知り合った。付き合いが長いため素でいられる。毎日のインデックスのメール交換が楽しみ。

神裂火織

聖人だけどワンパンで負けちゃった18歳。木原と同年。凜とただだけでなくギヤツプ萌えを兼ね備えている大和撫子。きつとこれからインデックスと仲良くなれるはず。

ステイル

出番もセリフも殆ど無い14歳。これと言って言う事はない

御坂美琴

原作通りの少女。作者の気まぐれでアンチの対象となってしまうた可哀想な子。上条さんとの時間を増やすから許してほしい。

白井黒子

少し変態成分が抜けた淑女。木原といる事でよりアクティブになり、身体能力も上がってる。木原のことは兄のように思ってる。

初春飾利

頭にお花畑がある子。木原によってお花畑がグレードアップされ首が痛くなることが多い。木原の事はいつもは頼りないけど、ここぞという時頼りになるお兄ちゃんに見える。恋愛感情かどうかは謎。

佐天涙子

一時期流行った佐天さんが能力に目覚めちゃったssに似た感じになった。能力者になれたのは嬉しいがなんとも言えない感情を持っている。目覚めたばかりでレベルは0。木原にはAIMジャマーを無効化する方法をまずは教わった。

木山春生

原作とは違い協力者を作ったことで、より効率的に目標を達成できた。ついでにテレステイナー・木原・ライフラインが討つべき悪だと既に木原によって知らされた。今後の活躍に期待大。

麦野沈利

ちよこつとしか出てないレベル5。木原とは友好的な関係にあるが、いまいち木原のことを信用していない。原作よりかは性格は良い。

フレンダ

フレ／ンダとなる確率は一応0。木原と合うたびにいじられひどい目を見てるが、アフターケアで優しくされるため±0どころか+で終わる。

絹旗最愛

セリフが一つしかない。御使エンゼルフォール墮して体を食蜂にしたら、見えそうで見えない角度でも見えちやいそうと4巻をどう書くかを困らせる娘。

滝壺理后

絹旗よりセリフが少なかった。書くべき内容がない、浜面とくつつけるべきか思案中。

月詠小萌 黄泉川愛穂

木原がとある高校に入ってから関係を持った。お昼は一緒に食べたり、能力開発の事とかの話をしている。

アレイスターIIクロウリー

原作では裏ボスだが、今作ではただの子煩悩な人間。アレイスターというよりアレイ☆。ギャグキャラとしての利用が捗る。そこまでプランが大事じゃなくなっていたり、息子と外を出歩くために色々準備している。

病院のとある2コマ目

インデックスを無事救うことが出来た次の日。いつもの病院の個室に二人の入院患者が居た。右手を包帯でぐるぐる巻にされ、なんとも言えない表情で隣の男子を見るツツン頭。本来ならば既に死んでいた筈だが、木原によつてその未来が変わつた。

そして彼の視線の先では……、

木原が女の子にあーんをされていた。

時はお昼を過ぎているが、その女の子は面談時間前の7時からこの病室に来て、木原にご飯を食べ続けさせている。30分おきに彼女と同じ制服の女子が新たな食料を運んでくる。その彼女、食蜂と上条は木原経由で一応は知り合いだ。しかし食蜂はただ木原にご飯を食べさせてあげること集中しており、一度も上条と話をしていないのだが……。

午前中は彼らの学校の先生や、どこから聞きつけたのかクラスメイト達がお見舞いに来ていた。もちろん食蜂は能力を使って彼らが疑問に思わないようにしてそのままご飯を食べさせ続けていた。

その集団が去ったあとは、インデックスや神裂、ステイルの魔術師たちがやって来た。流石にその時ばかりは木原も食事を止め、食蜂はインデックスと戯れていた。その際の顛末やこれからのインデックスのこと、そして木原の魔術についての話があったが、アホな上条や無関係な食蜂には話が分からなかった。インデックスは二人との話が終わったらまた戻ってくる。

三人が去ったあととは上条と食事をしながら器用に話す木原との会話がずっと続いていた。今の話題は『上城さんではなく、どうして分数さんが女子中学生にアーンをしてもらってるか』という、不満だだもれの物だった。

「さっきインデックス達につたえたじゃねーか。インデックスのアレを受けたお前なら分かるが、あれは粒子一つ一つが別もんだったろ？」

アレとは自動書記状態のインデックスが放った『ドラゴンプレス竜王の殺息』のことだ。

「確かに、幻想殺しが消すよりも早く他のが来て押し負けてたな」

「それ全ての式を読み取って、数値を変えたんだぜ。いくら消費魔力が少ないからって、塵も積もれば山となるだ」

「飯を食べさせてもらいなから返答する。」

「だからってどうして食蜂に食べさせてもらってるのか…」

「魔力つてのは元を辿れば生命力に繋がる。日頃から魔力を蓄えてたら何の影響も無いが、今回はそれを使い切っちゃまった。それでも魔力を使う場合は、さっき言った通り、その場で生命力を魔力に変える。HPをMPに変える感じだ、これなら分かるだろ？」

「はい」

「そうやって瀕死寸前で生命力を糧にしちゃったから、操祈が能力使って起こしてくれなかったら一ヶ月は寝っぱなしだったしな」

「…っ!!」

「能力で頭部だけは動けるようにしてもらって飯を食ってるんだが、食事つてのは馬鹿にできなくてな。嘔むタイミグや回数、飲み込むタイミングとかで魔力や体力を回復できる。それに呼吸とかでさらなる補助をかけてやれば、一日もあれば回復できるさ」

「一日つてことはまだ半分も言っていないってこと…」

「流石に前回までとは行かないさ。操祈は完全下校時間までには帰ってもらうさ。レベル5だからって女の子は女の子だからな。ちよつ、不機嫌になって箸のスピードはやくなっただけぞ!!」

なんて事をしながら談笑していると、扉が開いた。

「ただいまなんだよ!!」

インデックスが帰ってきた。その表情に曇りはなく、二人ときちんと話ができたのだ。なと三人は思った。

「おかえり」

「おかえりい、インちゃん!!」

仲のいい食蜂はインデックスのことを愛称で呼んだ。彼女は未だ扉の前から中に入ってこない。

「ん? どうしたインデックス」

「あのね、受付で分数の病室を尋ねてた人がいたから連れてきたんだけど、入れていいかな?」

「何人組だ?」

様々なことに手を貸している(出している)ため知り合いが多い木原は、誰が来たのか予想がつけられなかった。

「四人組なんだよ。たぶん私と同じくらいかも」

四人組でインデックスと同じ年だと一組しか思いつかなかった。ただの四人組だったらアイテムも思いつくのだが。彼女らはこんな明るい所にはこないだろう。

「いれていいぞー」

「だって!!入って入って!!」

その一声で四人が入ってくる。「おじやましませーす!」と佐天が大きな声で言ったあと三人が続ける。そんな中、食蜂と仲がいいとは言えない御坂が声を漏らす。

「ゲツ!食蜂操祈」

「あらあら御坂さん、ちゃんと挨拶ができないのかしらあ」

「あんたねえ…」

「おいお前ら、病院でドンパチを始めようとするな。それに、ついていけない四人がポカーンとしてるぞ」

常盤台の三人と木原以外がポカーンとしていた。

「分数先輩、分数先輩。彼女たちは一体どなたでしょう、もしかして先輩の…」

「4人ともそれだったら俺はどんだけゲスなんだよ。右から順に御坂美琴、白井黒子、初春飾利、佐天涙子だ」

超電磁砲以外は中一で、黒子と飾利はジャッジメントの後輩だ」

目線を変え、四人組を見る。

「そんでお前らに説明すると、隣をつんつん頭の奴が俺の後輩の上条当麻。案内してくれたのがインデックス、本名は長いから本人に後で聞いてくれ。俺と当麻の知り合いの子でイギリスからやって来た。んで、今飯を食わせてくれてるのが食蜂操祈。超電磁砲

と同じ、常盤台のレベル5だ。ってあれ？どうしたの？」

「れ、レベル5!!!どうしよう初春、私こんな短期間でレベル5の二人に会ったちやつたよ!!!」

「おおお、落ち着いてください佐天さん!!こ、こういう時は素数を数えればいいってネットに書いてありました!!」

「ええーろーろー!!!みさきつてれる5だったの!!!」

「あら、言ってなかったかしら」

活気あふれる病室の中、男子二人は姦しさに当てられていた。

病院のとある3コマ目

「どうしてアンタがコイツとつるんでのか聞いてもいいかしら」

「わたくしも聞きたいですわ分数さん」

現在病室には木原、食蜂、御坂、白井の四人しかいなく、他の四人は飲み物を買に行った。そんな質問をされても木原は食事を続けた。

「どうしてって言われても、昔から仲が良かったとしかかな」

「ジャツジメントとレベル5がそう関係を持つもんですか」

「あら、御坂さんはしらないのお。分数さんは研究者なのよ」

最後の一口を食べさせ終え、食蜂が言う。

「コイツが研究者？」

「そういや、レベル5で能力開発に携わって無いのは超電磁砲だけだったか」

「分数さんってそんなにすごい研究者でしたの…」

白井も知っていたことに御坂が突っ込む。

「黒子、あんた知ってたの？」

「ええ、能力が伸び悩んだ時に相談しましたら手伝ってくれましたの」

「『空間移動』系統の能力ってまだわからないことが多くて、専攻してる人でも分からないことが多いんじゃないの」

「ですのでそこまで期待してはいませんでしたの。悩みを相談して、心を落ち着けたかったのが一番でした。しかし、分数さんは翌日に数十枚の紙を持ってきてくれました。中身を見てみると学園都市にいる58全ての人の空間移動能力者のデータから得た、共通する点や異なる点。もちろん個人名は書いていませんでしたが、あのような情報は普通は見られませんの。そして、最後には普遍的は空間移動の演算式、つまりは3次元から11次元が書いてありましたの」

「その前に空間移動の演算を俺の演算に組み込もうとしてな、いろいろ調べた後だったから見せたわけよ。なかなか見当たらないとこだが、普通にネット上にあるし、見てる人は見てる奴さ」

その言葉に御坂は驚いた。いや、呆れたのほうが正しいだろう。自分の能力を向上させるためだけに、他の分野を専攻する人よりも極めてしまった彼に。

「次は何の研究をするんですかあ？」

食蜂が尋ねる。

「あらかた一通りは終わってるんだが、次はAI・M拡散力場かな。レベルアップの件で気になった事があるし、それに次に能力開発する子もそれ系統だしな」

「それって一体誰なんですか？」

「私も気になるわ」

「教えてくださいませ」

「仮にだ、お前らの知らない奴の名前を上げたところでお前らはどうするんだ」

呆れた顔で木原は返答する。

「そんな言い方をするって事は、私達の知ってる人ってことですねえ」

「言っちゃえばそうだが、そいつが言うまで俺は教えるつもりは無いぜ」

「ということは面白い物に行つた四人のうちの誰かの可能性は高いですわね。その中だとシスターの子が怪しいですのぞ」

「そうですね。初春さんも、佐天さんも無いだろうし。あのバカは、無いわね」

二人が誰なのかを話していると、廊下を走る音が聞こえてきた。飲み物を買に行つていた四人が帰ってきたようだ。しかし、見てみると初春一人しかいなかった。

「どうしましたの初春。それに、病院では静かにしないといけませんのよ」

そんな初春を軽く叱る白井だった。肩で息をして初春は喋り出す。

「さ、さささ佐天さんが!!」

「佐天さんがどうしたのよ」

「能力者になりました!!!」

「エエー……！！！！」

こうなると予想できた木原と食蜂は耳を塞いでいた。周りの病室に後で謝りに行かせようと木原は心に決めた。

「そんなわけで俺は涙子の能力開発をするから。できるだけ自由な時間、特にお前らの時間は削らないようにするさ」

そのあと戻ってきた三人を加えて、御坂と白井と初春に説明した。その説明中佐天は照れくさそうにしていた。

「でも本当に大丈夫なの？ AIM 拡散力場といえ、学園都市の最先端と言っても過言じゃないのよ」

「そのへんは大丈夫よお。昔の分数さんならともかく、今の分数さんは」

「それはどういう意味ですか？」

「なに、昔と違って今はちゃんとした設備もあるし最先端でもきちんと安全にやれるってことさ」

突然の食蜂からのキラークラスを丁寧処理した。

——操祈、あまり昔の事は喋るなよ

食蜂睨みを効かせる。

「しかし、佐天さんもついに能力者ですかー」

「まだレベル0だけどね」

「同じレベル0でも、何の変化も起きない上条さんからしたら羨ましいがな」

佐天の話題でみんなが盛り上がっている。

——こりや、真面目にやらなきゃいけないな。

本来ならばゆっくりと気が付けばレベルが上がっていた、というような感じにしたかった木原だが、こんなふうになったからには目に見え、感じられる様な速さで開発をしていかなければならなくなった。

——『木原』を捨ててからの初めての能力開発か。他所からちよっかいかけられないようにしておかないと。俺が『木原』抜けて結構経つが、まだ俺を戻そうとしている奴らもいるし。

「操析コイツラが持ってきたフルーツ盛り合わせから何個か切ってくれ。腹減った」

御坂がいるため食事が持ってこれないので、そう提案した

「分かりましたあ」

「アంతタにできるのかしら」

食蜂に御坂が言う。普段の二人の関係からすればいつもどおりの出来事だ。

「御坂さんは私の事をどう思ってるのかしら。家事洗濯、食事作りと大抵のことは出来

る女子力はあるんだゾ☆

「俺が一から教えてやったんだけどな」

「分数さんは黙っててくださいい！」

綺麗にりんごの皮を剥き、数個に切り分ける。

「でも、これぬるいわよ」

「ありがとな超電磁砲。『りんごがぬるい確率を零にして、ついでに適温の確率をM a X』に変えますつと」

皿の上のりんごが全て適温になる。

「ねえねえ、分数！いつものセリフの言い方がいつもと違うんだよ」

「ああ。昨日のごたごたの性か、少し能力が上がったんだよ。人が言った事象に一つ追加できるようになった、前まではそれが起きるようにセリフを作ってたがそれがいらなくなっただ」

食蜂にりんごを食べさせてもらい、インデックスの教える。実際は科学側に魔術を使えるようになった、ということだがこの事実は誰にも言わなかった。

とある錬金術師の

医者の子想より早く退院することが出来た木原は、インデックスと食蜂と一緒にシヨッピングをしていた。二人だけだったならば学びの園の中でシヨッピングをするが、今回は木原がいるということで普通の買い物となった。

普通とは言っても片や様々な実験に手を貸してるエリート科学者、片や学園都市に7人しかいないレベル5の一人。そんな彼らがセブンスミストのような何でも揃うお店に行くわけもなく、知る人ぞ知る高級ブランド店に足を運んでいた。

今回の目的は前の買い物の際に買えきれなかったインデックスの物と食蜂の服だ。現在インデックスは日中は木原の部屋で家事を学び、木原か食蜂と一緒にでかける。日が沈んだ後は、上条の部屋に寝泊まりしている。キッチンと上質な布団（上条のベットより良い）があり、寝相も良いため特に問題はない。上条もインデックスを妹のように扱っているため、男女の隔たりはない。もしあったなら、インデックス馬鹿な二人にいろいろ言われるためだ。

「今日もいっぱい買っちゃったわあ☆」

「でも、こんなに買ってもらってぶそくもみさきも大丈夫なの？」

「俺達は金なら腐るほどあるからな。操祈は買うものが色々あるかもしれないが、俺はそんなに物を買わないから特にな。インデックスは気にしなくていいぞ」

すでに三時を過ぎていた。朝から買い物をしてきたが、買ったものは配達されるので手荷物はあまりなかった。このあとは三人でバイキングに行く予定になっていた。

これからどうしようか話をしていると、インデックスがあるものを見つけた。

「あつ！猫だ!!」

ダンボールに一匹の猫が入っていた。インデックスは駆け寄り、猫を抱きかかえる。にゃーとインデックスの胸に頬ずりをする。

「ねえねえぶそく！この猫飼ってもいい？」

「うちの部屋はペット大丈夫だから飼うことは止めはしないさ。でもインデックス、ちゃんと面倒みれるのか？俺は外にいる時間が長い時が多いから、その子の面倒を見れるのはインデックスしかないんだぜ」

そんな親子みたいな会話をする二人。そんな二人を母親のごとく食蜂は見つめていた。

「が、がんばるんだよ!!この子、スフィックスの面倒はちゃんと見るんだよ!」

「そうか。ならいいぞ!」

「わあーい、やったー!!みさき見てみてー!!」

「あらあ、かわいい猫ちゃんねえ」

食蜂に猫を見せに行つた。

「スフィンクスはこうすると気持ちいいらしいわよお」

インデックスからスフィンクスを受け取り顎の下を触ると、スフィンクスは可愛らしい声を上げた。能力でスフィンクスの思考を読み取り実行した。

「私もやりたい!!」

食蜂から猫を受け取ろうとすると、二人の間に人が現れた。木原は食蜂の腕をとり、自分の後ろに引く。インデックスには現れた男のせいでは届かなかつた。

「啞然。アレのすぐ後だと言うのに、既に仲の良い者がいるのか」

「あらあ、あなたは誰なのかしらあ」

「漫然。それは君たちには関係のないことだ、私はこの娘に用事がある」

懐から鍼を取り出し首にさす。

「この娘に関する一切を忘れろ。そしてインデックス、少しの間眠れ」

木原と食蜂の体の力が抜け、目が虚ろになるのを見届けた後、男は姿を消した

数分後二人の目に生気が戻った。

「なあ操祈」

「なあにい、分数さん」

「俺さ久々にキレてんだよね。突然現れて、突然攻撃を仕掛けてきて、インデックスを連れ去ってよお」

「奇遇ねえ、私も少しばつかし頭にきてるわあ☆」

男の魔術は二人には効いていなかった。

「私の友達からたくさんの情報が来てるわ。あの男、三沢塾の理事長らしいわよお」

「なら殴り込みに行くか。俺達のインデックスを取り返しに。俺にしがみつけ」

「そんなことを言ってくれるなんてうれしい☆」

木原の体に思いつきり抱きつく。

「しかしなあ、お友達か。この前までは下僕達って言ってたか？」

「うっ、それは」

「どうせインデックスが言ったんだろ？『一緒に居てくれる人達をそんなふうにしたらダメなんだよ』的な感じだ」

食蜂からの返答がない

「沈黙は肯定と受け取るさ。よし、おそらく三沢塾らしいところも見つけたし跳びます」

か」

「私の手伝いはいるかしらあ」

「いんや。ここ最近調子いいから魔術だけでやってみるさ。んじや行くぜ」

二人と一匹の姿がその場から消えた。

時は加速して、もう日が沈みきっていた頃。三沢塾にて戦闘が開始されていた。先程インデックスを連れ去った男、アウレオルスアルスイザードの黄金錬成マグナによって上条とステイルが床に倒れていた。その際起きた沈黙によって、場違いな会話が聞こえてきた。

「分数さんが自信を持って魔術を使ったのに、どうして時間がこんなに経ってるのかしらあ」

「怒んなよー。俺だって魔術が関係ないものに使ったの、調子良くなってるから初めてだったしい。おそろくって言ってたしい」

「そんなこと言っちゃうと、ある事ないこと色々改善しちゃうゾ☆」

「これが終わったら好きだけにしていいから、そろそろ真面目モードに切り替えようぜ」

大声で話をしているため、今さら変えるも何もなかった。コンコンと扉をノックし、ガチャリと扉を開け入ってくる。

「おつ邪魔しまあす」

「ここは理事長室だから失礼しますだろ」

「ぶ、分数先輩」

「木原分数……」

「二人共よつす！インデックスを連れ戻しに来ましたー。早く返してほしいな」

「返さないと酷い目に合つちやうゾ☆」

「悄然。先程の二人か。どうしてここにいる、確かに私のアルスⅡマグナで記憶を消したはずだ」

木原が上条の元へ行き、右手を動かして上条の体に触れさせ、魔術を解いた。そのままステイルの元に行き、ステイルの魔術も解くように言った。

「それ は ひ み つ ☆」

ハモらせて返答する。その間に木原がアウレオルスに魔術で干渉し、記憶のロツクを解く。その次に、食蜂が予め木原に教えてもらったように魔術以外の記憶を覗き、木原につたえる。

「ただな、俺とお前の魔術つてのは似ててな。少し心が乱れただけで上手く発動しないことがある」

アウレオルスは驚く。目の前の少年は科学側の人間であるはずなのに、魔術を使うの

か。また、どうして自分のアルスⅡマグナの事が見破られたのか。

「そんなに動揺しなくていいさ。落ち着こうぜ。一つお前の疑問に答えると、俺は科学サイドの人間だ。けど、能力を開発を受けておらず魔術が使える。そして、お前は聞きたくないこともかもしれないが、インデックスはもうすでに救われている。お前が吸血鬼なんか頼つてるうちに、さつさとそのアルスⅡマグナで『インデックスを救える』と思わなかったから」

「貴様に何がわかる!!ひれ伏せ!!」

アルスⅡマグナを発動させ、木原を床にひれ伏せようとする。一向に木原は倒れない。

「だから落ち着けて。お前の気持ちもわかってるつもりさ。だから、お前が納得するような提案をさせてもらおう」

「漠然。それは一体なんだ」

「俺とお前との魔術勝負。俺が用意した課題をどちらが早く出来るか、先に10回早かったほうが勝ちだ」

アウレオルの顔が凍る。ついでに上条、ステイル、姫神の顔も凍る。唯一平然を保てたのは予め聞いていた食蜂だけだった。

木原とアウレオールの勝負は接戦だった。18回もの勝負の中、錬金術にかかわる鉛を金に変えたり、自ら手をくださないで具現化させたものだけで傷を付け合ったり、逆にそれを直しあったり。肉体強化をした体で指相撲をしたり。いつの間にか二人の間には友情が芽生えていた。そして最後の19戦目。木原がなんとか勝った。

「これで俺の勝ちだ。なかなかいい戦いだつたよ、アウレオール。いや、こんな呼び方じゃいけないな。名前を縮めて、アル、こう呼んでもいいか」

「こちらこそいい戦いだつた。負けたのは悔しいが、それだけの価値はあった。ありがとう分數」

あついで握手を交わす二人。

「断然。おまえにならあの娘を任せられる」

そう言つて部屋から出て行くとするアルを木原は止める。

「待てよッ！そうやつて逃げるのかよ！俺と本気でぶつかつてきたお前なら、逃げないできちんとインデックスと向き合うんだ！今までのこと、これからのこと、そうしなければお前はいつまでも苦しいままなんだぞ!!」

「…ありがとう、分数。私はもう一度向き合うさ」
涙を流しながらアルは答えた。

そんな状況について行けない三人は部屋の隅でステイルのルーンのカードを使って遊んでいた。食蜂は二人の戦いの実況をして一人楽しんでいた。

インデックスとちゃんと向き合ったアル。その後その場にいた皆でバイキングに行った。そこには笑顔の花がたくさん咲いていた。

これがとある錬金術師のハッピーエンド。

とある昼下がり

ファミレスの一角、そこには一人の男子と四人の女子がいた。一人はファミレスの中でシャケ弁を食べ、一人はサバ缶を食べ、一人はC級映画のパンフレットを読み、一人はぼーとしていた。彼女らは『アイテム』と呼ばれる暗部だ。

そんな彼女らと一緒に座っているのは、大抵着ている制服やブランド品の服ではなく、高級そうなワイシャツに黒のパンツ、その上に白衣を着ている木原だった。

「あんたから直接依頼つてのは珍しいわね。槍でも降るのかしら」

シャケ弁を食べながらアイテムのリーダーである麦野が言う。

「結局、分数が何か頼むときは裏があるってわけよ」

サバ缶を突いているフレンダが便乗する。

「お前ら、俺が店員の注意を逸らしてやってるからファミレスの中でもシャケ弁やサバ缶食えてること忘れんなよ」

「でも分数も白衣で超目立ってますけどね」

「そんなぶそくを私は応援してるよ」

イライラながら文句を言う木原に緞旗が追い打ちをかけ、滝壺が木原をフォローす

る。木原はかばんから紙を取り出し、麦野に見せる。今回の依頼の内容、報酬その他諸々が書かれている。それを麦野の隣に座っているフレンドが覗き見る。すると、表情がみるみると変わっていった。

「な、な、なんでこんなに報酬が高額なの!？」

「どれくらいなんですか? 超気になります!!」

テーブル越しにフレンドの持つ紙を奪い取る。そこに書かれていたのはいつもの十数倍の金額だった。滝壺もそれを見て驚いた声をあげる。

「今日いきなりだったし、お前らにはこれからも頼りそうだから投資だ。あとは、俺が持つてもあまり使わないからな。お前らに渡したほうが金が回って、俺の仕事も増えるってわけさ。それじゃ、今日の夜にまた会おう」

自分以外の分、つまりはアイテムの分のお金もテーブルに出して木原は席を立った。

時間は少し経ったが、四人は相変わらずファミレスにいた。

「いつも分からないけど、今回の分数は特に分からないわけよ」

「そういえばフレンドも麦野も分数とは超昔なじみなんでしたっけ?」

いままで読んでいたパンフレットを伏せ尋ねる。隣では滝壺が寝ていた。

「まあね」

「でも最初はアイテムとしての知り合いじゃなくて、麦野の知り合いだったけどね」
「麦野のですか？」

「なんだか仲良さ気な感じだったわけ」

絹旗が麦野に視線を向けると、面倒くさそうに頭をかく麦野がいた。

「どうしても言わなきゃいけないかしら」

「超気になります！」

暗部においても男女関係には敏感なため、絹旗もフレンダも、さらには寝ていたはずの滝壺まで頷いていた。この場合は逃げられないと悟り、言葉を紡ぐ。

「あんたらも知ってると思うけど、あいつは結構な実験に首を突っ込んでんの」

「超知ってます」

「研究者として長いことやってるからできる事なんだけど、他にも理由があつてね」

飲み物を一口含む。

「あいつ、レベル5で第三位以外の能力開発に携わったから何だけどね」

その言葉に三人は哑然とした。

「と言つても、なにもレベル1、2からレベル5にしたってことじゃないわよ。せいぜいやつてもレベルを一つ上げる手伝いをしただけよ。まあ、それでも十分何だけど」

「…今のぶそくと何かちがうところとかもあつたりする？」

滝壺が質問する。

「転機があつたらしく初めてあつた時からまるつきり変わったわ。あくまで実験に対してだけ。一つあんたたちに教えておくわ」

三人が？を浮かべる。

「その転機つてのは十数年前なんだけど。それまでの7年とそつからの10年だと、7年の方が多くの能力者を育ててるの」

「はっ？十数年前!？」

「あいつが裏では有名な『木原』だつてのもあるけど。ここ十年のあいつは被験者のことを結構大事にしてるのよ、滝壺や絹旗がアイテムにいるのもあいつも手引だったし。そのまま腐つて死ぬよりかはマシだろつてね。でも」

一呼吸おく。

「あいつは七年で、私達が今まで殺してきた人数よりも多くの人を殺したのよ」

「However、私は手を引かないわ」

とある研究所で木原と布束が話をしていた。

「とはいっても、あんたがやろうとしていることは無駄だし。今日やるのはやめといった方がいい」

「深くは教えてくれないのかしら」

「そんな事したら俺の首まで飛んでつちまうさ。まあ、そんなことは無いだろうがな」
忠告はしたからなど言い残し去っていった。一人残された布束は彼のことを考える。

——木原分数。色んな実験に首を突っ込んでいる変人。But、『木原』としては落ちこぼれた科学者。この実験にも私が携わった学習装置テストメントで首を突っ込んでるし。一方通行が殺したシスターズの後処理もしてる。Perhaps、何か裏で企んでるのかしら。

御坂が襲撃を仕掛けるまであと数時間。裏で色々していることがバレないように布束は普段どおりを演じる。

その全てが木原に筒抜けであることなど知らずに。

とある夜戦 その1

そろそろ日付が変わろうとする頃、これから仕事だというのに締まりの無い集団がいた。

「俺が薦めたいのは、金持ちがただの自己満足のために多額の金を出して作らせたという、C級どころかD級の映画だ。当然権力で無理やり上映させたり、販売させたがヒットするわけもなく。その人の屋敷に山積みになっていて、今では絶対手に入らないものだ。欲しいか？」

「超ほしいです！」

目をランランとさせ絹旗がねだる。そこにフレンドがやって来る。

「おーフレンド、準備終わったか？」

「なんでアンタがいるわけよ」

「昼間の紙に書いてあったろ？もしかして見てないのか？」

「そういえば、報酬を超見たあとは一回も見てませんでしたね」

じつーと見てくる二人の視線に耐えられなくなるフレンド。

「まっ、俺がいよいよとしまいとお前らのやる事は変わらないならな」

「結局私と絹旗で侵入者が来たら撃退すればいいわけ？」

「2つあるうち片方に戦力を偏らせたのも、超確率観測の結果ですよね」

絹旗はアイテムの主力である麦野と、対能力者として優良である滝壺がまとめられている事をそう解釈した。

「いんや、ちがうよ？」

「へ？」

絹旗の話聞き、それに納得していたフレンドも声を上げる。

「今回は確率観測なんて使ってなくて、ただのプロファイリングの結果で、犯人はこっちに来るよ。どうしてって思ってるよな。理由は簡単さ」

昼間に沈利から聞いてるよな、という前ふりをして告げる。昼間の事とは木原のこゝと、特に能力開発について指す。

「沈利も俺が開発したうちの一人だからさ、やるなら最後まで能力を伸ばしてやるさ。それが今回、初っ端からぶつけてもつまらないしな。相手が死物狂いで襲ってくる中で戦闘させないと意味がない。沈利とか、レベル5まで行くとそれ以上の変化つてのはそうに起こらないものだからな」

木原は腕時計に目をやる。

「そろそろ時間だな。それじゃよろしく頼む、沈利と理后が来る前にどっちかが倒され

そうになったらちゃんと手伝いに入るからよ」

離れる白衣姿に二人はいつもの彼とは違う何かを感じ取った。

時は加速し、先ほどの研究所に侵入した御坂はフレンドと対決していた。とはいってもすでにフレンドは敗北しており、御坂に彼女らアイテムのことを教えるように脅されている。フレンドは情報を教えてこの場をなんとかして逃れようとするが、御坂の電気舌がしびれ思うように喋れない。もう終わりだ、フレンドが思った瞬間部屋の壁が爆発した。

「思ったより追い込めなかったようだな、フレンド」

壁に空いた穴から出てきたのは木原だった。両手を白衣のポケットに入れている。

「木原、分数……」

「やあ超電磁砲。学園都市の闇を見た感想はどうだあ？」

「資料にあんたの名前があつた時は何かの間違いだと思つただけど、あんたも随分真つ黒なのね」

御坂が木原に電撃を放つ。しかし、木原に当たる前に霧散する。

「テレスティーナの時に分かつたもんだと思つてたが、随分とあまちゃんだな。俺は

「こっちの方出身だぜ？」

「…あんだ、何やったのよ」

「今から戦う奴に手の内を教えるわけがねえだろうが。フレンダ、痺れが切れたならこの部屋から出てアイツに連絡しろ」

「分かったわけよ!!」

「行かせるかっ!!」

先ほどと同じようにフレンダに当たる前に霧散する。

「ここからしばらくはちよつとした休憩タイムだ。お前が本気を出せるように、上手く調節してやる」

「っー」

離れていた木原が一瞬にして御坂の前へ移動する。確率操作以外の攻撃を知らないため、一先ず磁力で体を無理やり移動させ距離を取る。

「あんだの確率操作じゃ私には勝てっこないわよ」

「それは無い。確率操作を使えばテメエなんて一発さ。でも、今は俺はジャツジメントの分数でも、確率操作でもなく、科学者の木原分数としてここにいるからそれは使わない。といつても、お前が勝てる確率なんて零だがな」

幾度となく襲い掛かってくる電撃を霧散させる。いくらやっても意味が無いため、御

坂は先ほど木原が壊した金属の壁を操り、木原を挟めるために動かす。

ポケットに手を入れたままただ立っていた木原が、初めてアクションを起こした。御坂の思考や、磁場の観測によって安全地帯を見つけ、体を倒れるように潜り込ませる。

「甘いわよっ!!」

木原が逃げ込んだところに、金属板を落とす。

「ちっ」

木原の舌打ちとともに、金属板が宙に弾け飛ぶ。その時木原はポケットから右手を出していた。

「さっきから私の電撃が面白いように消えてたのもそれが原因ね」

右手には黒い機械感あふれるグローブが嵌められていた。

「この存在がばれたところで、攻略されたわけじゃないさ」

とある夜戦 その2

「どうした超電磁砲。全然攻撃が当たってないぞ？」

「うっさいわね!!」

御坂が電撃を放った瞬間を狙って木原が駆け出す。一瞬でトップスピードにいたり、御坂の懐に入る。

「このっ！」

余りにも早すぎる接近に対して、狙いも定めずに能力を発動する。

「そろそろ無駄って気づけよな」

全ての電撃が霧散しする。

「ぶっ飛びやがれ！」

懐にいた木原がノーモーションで人間が出せるスピードを超えた蹴りを放つ。

「っ!!」

磁界を創り木原の元から離れる。急いで創り出したため、碌な調節がされておらず、勢い良く壁に背中をぶつけた。木原は追撃をかけず、蹴りを放った右脚のつま先を床にトントンとぶつける。

「本来なら気づかれることなく、蹴りによつてぶつ飛ぶ筈だったが。生体電流から読まれたか…」

「あなたの手品のタネ分かつてきたわ」

勝ち誇つたように御坂は笑みを浮かべる。

「そう。別にだからといって何もないが。褒めて欲しいのか?」

しかし、木原は特段気にしなかった。

「人に向かつてやるのは嫌なんだけど、やらなきゃやられちゃうから許してね」

ポケットから小さな筒を取り出す。中には黒い粒子があり、それをこぼす。こぼれると同時に黒い粒子は剣の形に整形されていく。

「砂鉄か。それつてそのまま固定できないから、砂鉄を動かすことによつて固定を可能にしてるんじゃないか?」

「そのとおりよ。いわばチエーンソーみたいな感じね。だから、これに当たれば、スパツと切れちゃうわよ」

「段々と容赦がなくなってきたな超電磁砲。いいねえ、俺好みだ」

「アンタに好かれたつて嬉しくないのよ!!」

砂鉄の剣の形を細く長くし、木原へと駆ける。射程距離に入った御坂は横に一閃、剣を振つた。木原はそれより一テンポ早く右手を振るう。電撃のように砂鉄の剣が崩れ

る。

「甘いわよー！」

床に電流を流すことで、落ちた砂鉄に電流を流し砂鉄を持ち上げ木原を包み込む。本来、砂鉄は常に高速で動いているため、砂鉄の籠からは脱出することが出来ない。そう、本来ならば。

「アハハハ、いいねえ。レベル5か俺じゃなかったら死んでたぜ」

砂鉄の籠が崩れ、その中から無傷な木原が現れた。両手のグローブはボロボロになり、覗いて見える手は血があふれていた。

「これで何もできないわね。やっぱり私の想像通りだったわ」

「油断しちまったなあ。まあいいや、目的は完遂できた。それで、お前の想像はどんな感じだったのか、聞かせてくれるな」

完全に勝ちを確信した御坂は口を開く。

「あなたのそのグローブから、何かしらの電気を遮断する、詳しく言えば電気を吸収し放出する物質を出していたのよ。さっきの蹴りも電気を使って蹴りを加速させたのよね」
「なんとか及第点つてとこだな。物質や範囲についてもわかってりや褒められたんだが。ちなみに、グローブは物質を出すんじゃないやなくて操るためだったんだがな。俺様としてはそこまで行くと思ってた分残念だがな」

「…俺様？」

木原は腕時計に目をやる。麦野が着くまで後数分であると確認する。砂鉄の籠から出るためにグローブも壊れ、両手はボロボロのためこれ以上戦闘するならば確率操作を使うことになる。

「アイツが来るまであと少しあるし、ここで少し小嘶でもしようか」

「何言ってるのよ？」

「まあまあ、俺様は確率操作を使わないって決めた以上これ以上の戦闘ができねえ。そんな中で時間稼ぎをするにはこれくらいしか手がないわけだ」

本来ならばここで反論、または攻撃が来るところだが、木原の心理操作によりその考えが失われている御坂は何も言わない。

「この街のレベル5についてだが、どうして七人なんだと思う？レベル5の基準は色々あるが、簡単なのは強さだろう。たった一人で軍隊と同等の戦力を有する」

「けど、それだけだったら結構な数の能力者がいる。表しか知らなくてめえは分からないかもしれないが、ある奴は触ることなしにあらゆる物を転移させられる。ある奴は未来予知ができる。これだけでも軍隊ともやりあえるはずだ」

御坂は木原の話に意識を傾ける。

「しかし、そうならないのは何故なのか。俺様と違ってアホな奴らは『そこまで能力が強

くない』だの、『そんな器じゃない』なんて考えるらしいが、俺様はある仮定を考えた。仮定と言うには何の根拠もないから発表はしないがな」

「科学はオカルトを否定してるが、外の奴らからしたら科学の超能力もオカルトによる現象も変わりやしないのさ。外から考えた時、学園都市の科学Ⅱオカルト、なんて方程式が成り立つ。そこでオカルトで『七人』のものに目を向けた。有名なのは『七大天使』だ」

魔術に縁のない御坂であつたが、そのうちの4つは分かっていた。

「ミカエル、ガブリエル、ラファエル、ウリエルとかね」

「いわゆる四大天使って奴だ。そこにあと3体、これは宗派によって変わるんだが。まあ、これがレベル5が俺様が考えたレベル5が七人の理由だ。ここに、追加の補足を『する』」

「天使は ^{angeli} angels、原義だと「伝令」「使いの者」とかになるんだが、これを俺様たち科学に落とし込むと。科学とは反対にいる者たちへの使いの者となる。簡単に言えば、別の仕組みで成り立っている場所を無理やり科学側にするってわけだ」

「ちよつと待ちなさいよ。それじゃまるで、戦争するために私達レベル5がいるみたいじゃない」

声を荒らげる御坂。しかし、木原は止まらない。

「第一位の一方通行は『移動する絶対要塞』。誰も崩すことが出来ずに本拠地まで行き、敵を潰す」

「第二位の未元物質は『武器庫』。次々と未知の物質を創り出すことで、敵を翻弄する」

「第三位の超電磁砲は通信社会における最大の支配者。電気系統から侵入し、敵を崩していく」

「第四位の原子崩しはその膨大な破壊力による敵の殲滅」

「第五位の心理掌握は前時代的な者達の天敵。絆で結ばれる者たちを内側から破壊する」

「第六位はいるかいけないか。それすら分からないため、疑心暗鬼に陥らせ、敵の戦力を削ぐ」

「第七位はイレギュラーに対する秘密兵器。イレギュラーにはイレギュラーを」
場が凍る。時刻は麦野が来るまでほんの少ししかない。

「そこで問う」

木原の声がよく聞こえていた。

「御坂美琴、お前は どうする？」

初めて木原が御坂のことを名前で呼んだ。

とある夜戦 その3

「御坂美琴、お前は どうする？」

次の瞬間、木原の後ろの壁が赤く色を変えた。それを見た御坂は緊急回避をするが、それを見れない木原はその場に立ったままだった。極太の光線が木原を包む。壁の穴から麦野が入ってきた。

「分数、アンタなに昔みたいになってんのよ」

「ちよつとあんた！分数が死んじやったんじやないの!？」

「こんなんで死ぬやつじやないわよ」

「…確かに死にはしねえが、酷過ぎやしないか？」

何事も無かったかのように木原が立っていた。御坂はあり得ない光景を目にして、目を丸くした。

「何か昔みたいになってたから、昔みたいにやってもいいのかと。穴の向こうにフレンドがいるから合流して、絹旗のところに行ってもらえるかしら」

「もとからそのつもりだったさ」

穴からフレンドが手招きしている。

「待ちなさいよっ！」

「あんたの相手は私よ」

木原に電撃を放とうとした御坂に原子崩しを放つ。無事に穴までついた木原は後ろを振り返つて一言。

「いろいろ調整して威力も戦闘も殺人級だからつてやり過ぎるなよ。ここで壊すには惜しいからな」

「大丈夫よ」

「そうか」

手を振り穴へと入っていった。

「そんで、最愛はどこにいの？」

「端末を見れば一発なわけよ」

「それが出来ねえから言つてんだよ。サバ缶食い過ぎて脳みそくさつたんじゃねえの」

「どうして私にはいつもそんなに口悪いの…。ほい、2つ先のブロックを過ぎたあと右

に曲がつて3つめの扉なわけよ」

木原に背負われながらフレンドが道を伝える。フレンドは先程の戦闘で脚を負傷したため、木原が来た時は何とか部屋の外に出れたが、それからは脚が痛くて動けなかった。

麦野の指示で絹旗のもとに行く事になったが、動けないフレンドは木原に背負われることになった。しかし、木原も手を怪我をしているため、嫌々ながら『フレンドが背中から落ちる』可能性を低くして背負っている。

木原としてはこんな事で能力を使いたくないため、偶々落ちればいいという期待を込めて、可能性を零にはしなかった。

フレンドの教えの通り道を進み、扉を開けると絹旗と布束、その他数人がいた。中には息絶えた者もいた。絹旗は二人が来たことに特段感情を抱かなかつたが、布束は違つた。

「やっぱり貴方が関係してたのね」

「超黙つててください」

布束が木原に声をかけようとしたが絹旗に止められた。

「今、沈利が侵入者と戦つてるから、被害が来る前に撤収するぞ。どうせこの建物ごと壊れるだろうから死体は放置でいいや。布束は利用価値があるから連れてこいよ」

「超了解です！」

「それと、背中に張り付いてるコレも一緒に連れて行ってくれないか？」

「イヤですよ」

「ガチトーンで拒否られたわけよ！」

「口癖の『超』も付かなかつたしな。なら良いや、いつ偶然落ちるから知らないがこのままで。布束を俺に割り当てられた車に運び終わったら理后のいる車で待機で」

「ちよつと！今聞き逃しちやいけない事が言われた気がするわけよ!!!」

その言葉を見殺して木原は待機場所へと向かっていった。少し時が経ち、絹旗は言われた通りに布束を運び車へ戻った。現在木原と二人で車に乗っている。

「それで俺に何か言いたいことがあるんじゃないのか？」

「E x a c t l y、私があそこで感情プログラムをインストールしようとした時。上位個体、20001号を通じなきゃできないと言われたわ」

「そいつについてのことか？俺は何にもしてないぜ。そいつの存在を知った時は、制御するにはやりやすいと思って止めはしなかったが」

「B u t、私が言いたいのはそのじゃないの。インストールが失敗した後で、『同列のプログラムは既にインストールされています』と出たのよ。これをやったのは貴方で間違いないわよね」

木原は携帯端末を開き、時間と位置を確認した。

「そこまで分かっているならいいや。これからある仕事をしてから向かうところがある。そこでこの実験のある一面を見せてやる。そこを見たら、おまえの疑問は晴れるさ」

アイテムの面々に連絡をして、車を走らせる。

目的地につくその途中で、先程いた研究所は跡形もなく崩れ落ちた。

U A 1 0 0 0 0 突破記念 & ヒロイン決定記念

数十台のモニターには、幾万もの数値が映り、それを立った2つの瞳で少年が見つめている。少年と言うには幼すぎるほどだが、不思議なことに白衣を着ている姿が様になっっている。

「全員がねむりについたな。まあ、おれさまの予想どおりになって少しつまらんが」

舌つ足らずで、高い声出一人声を出す。装置をいじり全てのモニターの電源を消し、椅子から立ち上がりドアへと向かう。少年の背に合わせて低めに設置されているセンサーに触れ、ドアを開けようとする通信が入ってきた。

「なんかようか？」

「木原さんに会いたいという方が来ておりました」

「そいつの名前は？」

「木原数多と名乗っています。たしか、精密緻密が得意だとか」

「とくいと言ってもおれさまとくらべたら『うぞうむぞう』般人だろうな。いいや、木原のよしみで入れてやるか。おれさまはここでまってるから、お前が連れてこいよ」

「分かりました!!」

数分後、部屋の扉が開いた。一人は先ほど話ををした白衣の研究員。もう一人は、同じく白衣だが中に着ている服のセンスが少し怪しい男だった。学生ならば怖がり、大人であつても少し怖さを感じるような顔つきの彼。まだ未来のように刺青をしていない木原数多だ。

彼を連れてきた研究員は足早に部屋を去つていった。

「テメエが木原の最高傑作か。ただの言葉を覚えたての餓鬼みてえだな」

「そういうあんたこそ、一目見ておれさまのすごさが分からないとか、にんげんとして終わつてんじゃねえの? あー、なんていったけ? まあいいや」

そんな少年を数多は観察する。

木原^{ぶそく}不足。『木原』に最短で目覚め、その日のうちにある分野を変えたという逸話を持つ三歳。『木原の中の木原』、『木原としての最終到達点』と呼ばれ、木原で知らない物はない。

しかし、目立てば当然目を付けられる。彼は上層部の命令によつて、ほぼ毎日一つの研究所に閉じ込められていた。

数多も同様に上に不足の元で研鑽を磨くよう命令された。本人としては不服だった。木原で最も優れているといつても二周りも年下の彼に教わることは、プライドに障るも

のがある。さらに、殆どの分野を網羅している不足は『破壊』を司っており、精密・緻密数多とは相性が悪いと考えていた。

「あんたがアレか。昨日上から来たヤツか。凡人に天才のたの本来おれさまのぎじゆつを教えろつて。そのかおは、『精密・緻密』と『破壊』が合わないとかおもつてるな。まあいいや、ついてこいよ」

椅子から勢い良く、パンツという音共に立ち上がった。ドアを開け、ある場所へと歩いて行く。数多も乗り気では無いが付いて行く。不足から何かを盗む、事が上から命令されたことのため仕方がないと諦めた。

共同の研究所とされているため膨大な敷地なのだ。さらに、共同利用されてはいるが殆どが不足の専用の部屋となっており、同時に複数の実験がされていた。

十数分ほど移動した頃だろう、不足の目的の部屋に辿り着いた。それまでに会話はなく、リノリウムの廊下を歩く二人の足音しか響かなかった。部屋に入り、モニターを点ける。先ほどの部屋とは違いモニターは一つしかない。

「なんだこりゃ？」

モニターにはベットに載せられた、多くの子供が映っていた。疑問はそこではない。そんな光景は数多にもとつても縁があるものだ。

おかしいのは誰一人として、生きているのに死んでいるように見えている点だった。

寝顔に感情が見て取れず、魂という中身が無い人形がそこにはいた。これを破壊というにはあまりにも精密過ぎるほどの調整だ。

「こいつらはおれさまが上からおし付けられたやつらだ。どつかのバカが金をムダにつかつたせいでけんきゆうしやは皆逃げた。コイツラはただ生かされ、死ぬこともできなかつた」

白衣のポケットから錠剤を取り出す。

「これをしてるか？」

数多は目を見開いて驚く。

先ほど不足が取り出したのは、最近とある木原が開発した幻覚を見せるのに特化させた催眠薬だった。開発されてから間も無いため、もっているのは数少ない暗部で、それも人に対する影響も考えない者達にである。

「そのはんのうはしつてるらしいな。このさいみんなくは、どちらかと言えば『悪い』方のげんかくをかけやすくする物なんだが。これをそのままこいつらに使つてころすのは面白みに欠けるし、おれさまの思想に合わねえ。どちらにしる死んでいくやつらだ。じつげんたいとして使うにはちようどよかつたから、くすりを少しいじつて『理想』というげんかくをみせてやつたのさ。そして今日、ぜんいんがげんかくの中で幸せな『現実との別れ』をぶじおえた。中々壊しがいがあつた」

キーボードを使って画面を切り替える。現れたのは複雑な化学式や検査結果、服用状況などだった。それを見て、数多は戦慄を覚えた。

こんな餓鬼が、『破壊』という『精密緻密』から程遠い物を司っているヤツが、ここまですべて、少し違っただけで全てがおじやんになることを成し遂げたのかと。

いつの間にか数多は笑顔になっていた。それを見た不足も歪に笑った。

「これがわかるか。ただの『凡人』^{木原}じゃなく『いかれた奴』^{木原}だったか。なあお前、木原数多、おれさまの下につかねえか？どちらにとつてもいいコトしかないと思うが」

「ああ、逆にこっちから頼みたいくらいだ」

小さな部屋に二人の笑い声が響いた。

「チツ」

上層部から送られてきた指令書を見て不足は舌打ちをした。

パラメータによりレベル5になりうる少女を開発を遂行せよ。

という簡素な中身だが、『破壊』するな、手を貸すだけであつて直接レベル5にしては

いけない、などと禁則事項が多く書かれていた。

本来ならば、弟子になった数多を向かわせて自分のやりたいことをするのだが、数多も数多で別のレベル5候補のベクトル操作の開発を任されていた。

上層部のおかげで活動出来ているために、大きく出れない不足であったのだ。とりあえず渡された資料に目を通す。

今回の被験者の名前は麦野沈利。レベル3の電気使用エレクトロマスター。年齢は2つ上。二年前に外から来た金持ちの研究員の娘。一年と半年にレベル2として能力者に目覚めた。

後日、指定された研究所に向かう。行くと決めたは良いが、やる気が出ず欠伸をかみ殺していた。

「木原さん、今日から娘の事をよろしくお願いします」

目の前で腰を低くしてお願ひしてくる男が居るのも気に入らなかった。身内を自ら開発するなど、良心やその他諸々の性でうまく行くはずが無いのだ。適当に返事をする。

レベル5に直接出来ない不足は今回、能力開発をすること自体を止めにした。これからレベルが上がった際に、より強い自分パーソナルリアライティだけの現実を確立させるために不足の持つてる知識を与えることにした。

『破壊』を司るからと言って、何も知らずにただぶち壊すだけでは無い。破壊する対象

物を観察し、分析し、全てを数式で表してから、徹底的に破壊する。それが不足の流儀だった。適切な破壊を超えた先にある物、それが不足が目指している物。

だからそこ、ただ壊して良い気になつている木原幻生を不足は嫌い。精密緻密の数多とは上手くやつているのである。

挨拶を終え、早速実験に入る。初めは代表者である麦野沈利の知識確認だ。ここに来て数年は経つており、尚かつレベル3であるため、同い年の子と比較すれば頭は良い方であるが、不足からすればまだまだとしか言いようが無かつた。

「今日はよろしくおねがいします」

綺麗な茶髪の女の子がやつて来た。不足は流石良いとこのお嬢様だな、そんな印象を受けた。

「そんなにきんちようしなくてもいい。おれさまがちよくせつ、てめえを開発するわけじゃないからな。今回のけいけんがてめえの為になる物を中心とするから、今は理解して、使えるようにしようなんて考えなくていい。それじゃ始めようか……」

これが将来の第四位と木原の初めての出会い。

そして彼女は、この出来事をいつまでも覚え、彼に感謝し続ける。

食蜂操祈は少し苛ついていた。彼女が保護監禁されている部屋には、現在彼女だけでなくもう一人いた。

「ねえねえ、みーちゃんみてー」

必要以上にスキンシップを取ってくる、ドリーだ。食蜂は詳しく教えてはもらっていないものの、何かしらの実験に関わりがあることは想像できた。

しかし、そんなドリーもそこまでのストレスサーとなっている訳ではない。最初の内はこの馴れ馴れしさを苦手としていたが、ここ最近になってこの馴れ馴れしさが癖になつていた。

では何故苛ついていたかという点。今日、ドリーの保護者が来るからだ。大抵、研究における保護者というものは嫌われるのだが、ドリーはむしろ来るのを楽しみにしていた。

「えへへ、きようはおにいちゃんがくるんだよ!!」

自分のドリーが盗られた。そんな感情が食蜂の中にあつた。

部屋の扉が開く。そうして現れた人に食蜂は目を奪われた。なぜなら彼は、食蜂の心

理掌握対策として作られたヘッドギアをつけていなかったのだ。

「おにいちゃん!!」

「久し振りだな」

ドリーを抱き上げた。そんな彼を目を細め観察する。

少し茶色が混じった短髪に、モデルなどよりは劣るが世間一般からすれば整ったと言われる様な顔。ただし、隈があつたり、嘘つきくさい笑みを浮かべているのがマイナス点だが。

評価されていることを知らず、それでもじつと睨んでいることには気づきながら、ドリーをおろし座る。すると、ドリーはあくらで座っている彼のの上に座る。

「初めまして心理掌握。いや、みーちゃんって方がいいのか。うちのドリーがお世話になつてるな」

「……初めまして。貴方の名前はなんて言うのかしらあ」

二人の視線が火花を散らす。

「だめっ!!ケンカはだめだよ!!」

ドリーが二人を止める。

「分かつてるわよお」

「俺は木原分數だ」

その言葉を聞いて食蜂は座っているにもかかわらず、立ち眩みが襲ってきた気がした。

木原不足。出会ったら終わるとして知られる、木原幻生と並ぶ危険な木原だ。ここ最近では活動して無く、研究者を辞めたか死んだと思われる。

「ああ、苗字の方は聞いたことがあるだろうから言わないが、下の方の漢字は不足ふそくじゃなくて分数ぶんすうだから」

ドリーの頭を撫でながら補足をした。食法の情報網に分数という名前はなかった。ドリーは撫でられるのが気持ちよかったのか、体制を変え木原の膝枕で眠っている。

「それで、『木原』が私に何かようかしらあ？」

分数という名前を聞いたことが無くとも、木原という事だけで警戒するには十分過ぎる。口で聞いたものの能力を使って木原の頭を覗く。

「やだねえ、そうやってすぐに能力を使っちゃうのはよ。自分の利益の為だけに使うとか。まあ、今回はドリーも関わってるからそこまで強くは言えないか」

ニヤリと口を歪める。

「なっ」

能力から何一つとして情報を得られなかった。見えたのは膨大な数による数式だけ。無理やり支配下に収めようとしても、数式を操れるだけ。

「こちとら、落ちこぼれちやいるが木原なんだぜ？なんの対策もしないで来るわけが無いだろよ」

ニヤニヤとして顔が食蜂の精神を逆撫でする。

「そうイライラするなよ。今回の心理掌握に対する防衛は二次的なものだからさ。本来なら、全てを知らせたほうが良いんだが仕方ないんだ」

「貴方の目的は何かしらあ？」

膝の上で寝息を立てるドリーの頭を撫で、ドリーを見つめて言う。

「この子の救出だよ。『壊す』事しか出来なかつたら俺に出来ることをするだけだよ」

数日、または数週間、もしくは数ヶ月経った頃。ドリーが体調を崩した。食蜂はそんな彼女が研究員に連れ去られていくのをただ見つめる事しか出来なかつた。

この前来た、あの木原が言っていたことを疑問に疑問を抱きつつ、彼女は研究所を全て把握した。ヘッドギアによる防衛も効かないほど、本当の意味で超能力者への成つたのだ。

そんな彼女に一通のメールが届いた。内容はとても簡素で、ただ指定された場所に来い、というだけだった。

正直言つて怪しかった。それだけならば行こうとは思わなかつた。しかし、その本文

の最後には『本物のみーちゃんより』と書かれていた。

罨かもしれない、そう彼女は思った。それでも行ってみる価値はある、短略な考えであつたが、それだけ彼女の心をドリーが占めていた。

指定された廃墟のある一室の前に辿り着く。扉を開けた時、嘘の情報で騙されて呼び出され研究者に捕まろうとも、ドリーに会えるかもという希望を得れたためどうなつてもいい。そんな覚悟で扉を開けた。

ドンツ、そんな衝撃がお腹を襲つた。これで人間としての命は終わり、実験体として死んでいくのかと思つた。しかし、下の方から啜り泣く声が聞こえた。

「み、みさきちゃん」

懐かしい声が出た。あの日、名前を教えて別れ離れになつてしまつたあの子の、ドリーの声だ。

「またあえたね、みさきちゃん」

「そうねえ、ここまで運命力があると思つてなかつたわあ」

ドリーを抱きしめる。その瞬間、食蜂の涙が零れる。ドリーと離れてから凍りついた心が溶けていく。

互いに抱きしめあい、数分泣きあつた。

「おにいちちゃんとみーちゃんがたすけてくれたの。でも、そのあとカラダこわしちゃうから、ずーっとみさきちゃんとあえなくて……」

ドリーが倒れてからの事を食蜂に伝えた。伝え終わるとともに、隣の部屋へと続くドアが開き、二人の人影が現れた。

現れた二人の元へ食蜂の手を取って駆けていく。

こうして彼女と彼女と彼女の話はハッピーエンドを迎えた。

少女は思う、これが彼を意識しだした最初の出来事ではないのかと。

少女は考えた、彼を思うと胸が熱くなるこの感情は何かと。

少女がその感情に気づくまで、もうすこしかかりそうである。

ハッピーエンドまでの序奏／とある乙女の恋心1

崩れ落ちる建物を背にし、木原と布束を乗せた車は目的地に向かっていた。車内には二人の他に3人おり、一人は運転を、他の二人は木原の手の治療をしていた。車内であるため応急処置程度しかしていない。

数分車を走らせて、とある路地の前に着いた。ここで布束は木原には妹達回収の仕事がある事を思い出した。運転手が布束を車から降ろす。木原は先程とは違うグローブを装着して路地に進んでいく。

鉄のような匂いを布束は感じた。もう少し歩みを進めると、赤色が目に飛び込んできた。目線を動かすと、片腕を無くし肩から血が出ている妹達と、それを見下している白い少年がいた。

「どうして裏方がここに来てんだア」

学園都市最強一方通行。分数と同じ木原によつて開発を受け『ベクトル操作』という能力を手にした。誰も彼に触れることは出来ず、負けたことは無い。そして、妹達を20000体殺戮することで、レベル6になろうとしている。布束の認識はこんな感じ

だった。

「あつちやー、少し時間をミスつちまったか。クソ野郎と会いたくなかったんだがな」

女性や後輩に向ける目付きとは違う、冷徹な眼。直接向けられていない布束ですら鳥肌が立った。

「やる気か？」

「邪魔、どけろ」

回収対象である妹達の間にいる一方通行を押しつけようと、木原が一方通行に触れようとした。何してるの、と声を荒らげようとした。普通ならば反射によって木原が怪我をするかもしれないからだ。

しかしそうならなかった。

クローブをはめた手で一方通行の体に触れ、そのまま押し、妹達への道を作った。

「ああ!?!てめエ、なにしやがった」

「何ってやられたお前の方が分からないわけないだろ。お前の『反射膜』に触れて、お前を退かしたただけだ。やっぱり邪魔だわ、どっか違う所に居ろ」

確率操作で『一方通行が存在する場所』を変え、一方通行を他の所に飛ばした。既に

動かなくなった妹達に触れる。心臓は止まり、体は冷たくなっていった。布束は目を伏せ、唇を噛む。

どうしてここに連れて来たのか。彼女たちの死を見せつけて彼は何をしたいのか。何故、何故、何故…。

「…い、おい！」

耳元で叫ばれ、意識を外に向ける。

「ここから先は俺はついていかねえから、こいつらの指示に従え。アイツのことを保護者に伝えに行かなきゃいけないなくなった。俺から言えるのは、俺が関係している限りはハッピーエンドがそれなりに多いって事だ。そこそ期待して、待つてな」

布束を乗せた車、患者が生きている限り必ず救う医者がある病院と、その地下にある巨大な地下都市へと向かっていった。

「はあ」

朝とお昼の丁度中間ほど、食蜂は一人カフェため息をついた。

木原と会えていない。

理由はこれだけだ。

それまでは良くドリーや警策と一緒に買い物をしたりお話をしたり。最近ではそこにインデックスも交わっていたりする。

それ以外にも街で偶然あったり、前もって決めたりして二人でお出かけをしていたが、ここ十日間、街で会うこともなければ携帯も全く通じていなかった。

「はあ、どうしてあえないのかしらあ」

脚をパタパタさせ気を紛らわせる。

そういえばここまで長い間会えなかったのは初めてかもしれないと思った。木原は基本女性に優しいためお願いとあらば殆ど聞いたり、ジャツジメントの見回りで良く会ったりしていた為だ。

この感情が何なのか全くわからない。

おそらくその場に派閥の側近がいれば驚くようなまで、不機嫌な顔で飲み物を飲む。

「こんな普通の店に一人でいるなんて珍しいわね」

ふと声をかけられた。能力は基本オフにしているため、顔を見るまで誰か分からなかった。

「そうかしらあ、私は良く来るんだけど。そして、麦野さんと会うのは久しぶりなんだゾ☆」

食蜂に声をかけたのは、深夜仕事を終わらせ睡眠を取った後、いつものファミレスに行く途中だった麦野だ。第四位と第五位、有名人がいたがそこまで表の人には顔を知られていなかったため騒がれることは無かった。

「相変わらずキャピキャピしてるわね。これならまだ第三位のガキの方がましか」

「あらあ、御坂さんに会ったのかしら？」

「分数のやつに頼まれて一戦したのよ。一戦って言っても、私の能力向上の為だからそこまで本気じゃなかつ……。なんて顔してるのよ」

木原の名前が出てから、睨むように麦野を見ていた。

「別に何でもないわあ」

「嘘ね。分数と会えなくて悲しかったりするの？」

「うっ……」

「凶星すら出来てないじゃない。けど、アイツと一緒にいるってのは疲れるわよ」

食蜂は？を浮かべる。

「一応アイツの付き合いはアンタより長いから言えるけど、きつとアンタの感情には気づいてると思うわよ」

更に？を浮かべる。

「何よその顔は」

「私の感情ってなんのことなのかしらあ」

その時麦野は思った。この子まだ自分が分数に惚れていると気付いていないのではないかと。正直言つて傍から見たら誰でも分かるほどなのだ。それを本人が気付けない。

「そうねえ、少し時間もあるし、アンタの知らないアイツの事を教えてあげようかしら」
店員に飲み物を頼み、食蜂と同じ席に座る。

これから語るのは、木原分数が木原不足だった頃の話。

完全に壊れ、完全に足りなかった子供

人間としてあらゆるものが不足していた頃の彼の話。

とある乙女の恋心2 / 木原達のとある計画

「まず予備知識として、木原がどうやって生まれるから知っているわね」

食蜂は首を縦に振り肯定する。

学園都市の裏に少しでも触れた者なら皆が知っている、『木原』という危険物。

生まれた時からその優劣が定まっており、後天的要因は無い。

「私自身も闇に落ちてから小耳に挟んだ情報をまとめた物しか知らないんだけど。アイツは『木原』という枠を超えるために色々されたらしい」

自然発生する『木原』のあいだに意図的に出来た彼は、母親の中にいる時から既に様々な事をされていた。目指すは異彩を放つ『木原』。

生まれながらにして既に木原に目覚め、目的のためにすぐ動けるような体と精神を。

そうして生まれたのが、名前を持たない『木原』だった。

母親は出産と共に亡くなり、父親は家族としてではなく研究者と被験者という関係を持ち、彼は成長していった。

たった一年で研究者を超えた。そうして彼はその男をこの世から消した。その際言った言葉が、『あのおとこの言うようなあまいかんがえでは、なにもみえない。俺様が

みずからのでで「壊して」、全てをきゆうしゆうしてやる』だった。

そうした知ることには貪欲な彼に付けられた忌名が、木原不足。

足りないものを補うためだけに壊し、壊すことで全てを極めた『木原』を示すためだけの言葉。

そして、本人以外が知らないあることがきっかけで彼は『木原』から『人間』になった。

全てを知った彼だったが所詮は知識だけであり、知識だけではどうしようもならないものがあつた。

それが感情。その中でも特に分からなかつたのが愛情。愛情を最も注いでくれるはずであつた親もおらず、幼かつた彼に向けられたのは畏怖の感情のみ。

それ故に後輩や女性に異常なまでに優しく接する。これによって、知識で知る愛情を理解しようとしている。

しかし無駄なことである。それはただの真似事であり、本物でしかない。十数年間向けられていない愛情を受けているとだと彼は気づいているが、理解していない。

だからこそ、食蜂が彼に好意を向けていることに気が付いているが、理解できていない。未知を解き明かそうとした彼ではなく、ただの人間である彼の彼では何も進展しな

い。

——みたいな感じよ。知ってる情報もあつたかもしれないけど、役に立つたかしら」

飲み物を飲み終えた麦野が尋ねる。食蜂は麦野ではなく、何も無い空間をただ見つめている。

食蜂から木原への感情を教えられて呆然としているのではない。それに関してはむしろ、どこか心の中で納得している節がある。

自分はそんな彼に愛を教えてあげられるのか、ただそれだけが頭の中にあつた。

「ふふふ。これじゃ私より分数さんの方がヒロイン力高いじゃない」

自分のやるべき事は決まった。後は行動に移すだけ。

「でも気を付けなさいよ。最近また、昔不のよう足になつてるんじゃないかって、何人か思つてるらしいから。私も昨日のアイツを見て、あり得るとか思つたし」

麦野は目を伏せる。

すると、ガラスのコップを指で弾く澄んだ音が聞こえた。

「大丈夫よお。私の乙女力はそんなのに負けないんだゾ☆」

学区の外れ、ある建物に木原は入っていった。その建物は地図や書類にはただの研究所だと記されているが、実際には研究所とある部隊の本拠地の2つの役割を持っている。

ハウンドドッグ
猟犬部隊、分数の弟子である数多がりーダーを務め、アレイスタター統括理事長直属の部隊だ。その名の通り嗅覚センサーで相手を追い込み、絶対的な火力で相手を殲滅する。基本が追撃であるため、反撃などには弱い。また、構成するメンバーがどうしようもないクズ達なのでいくらでも変えが効く。

しかし、ここ最近の任務はそこまで難易度が高くない。その理由は単純で、敵が強大になる前にアレイスタターが指示し容易に殲滅できることにあるだろう。

故にクズ達は慢心し、この仕事を甘く見ている節がある。例えばこんな風に、本来ならば部隊側のエリアに入れないはずの研究員の姿をしている分数が、すんなり入れてしまっている。

「数多はやっぱり自分以外の事となると甘いなあ。こんなんだからアレもあそこまで狂っちゃったと思うんだけど、そこんとこを君はどう思う？」

人の少ない廊下で、偶然会った隊員を倒し椅子代わりにしている分数が尋ねる。椅子にされている男は何も言わない。

「どうした早く答えろよ。てめえが通信機を出すのを渋ってるから、時間潰しぐらいはさせろよな」

「……………」

「それでも無言を貫くか。まあいいや、通信機ぐらいは簡単に盗めるんだし」

服の内側に隠し、絶対他人に葉取られないところにあるはずの通信機が取られ、椅子にされている男は驚く。数多が使っているであろう周波数を予想し、端末の周波数を変え通信する。

「よう、数多くん。お前に用事があって来てみたんだが、こんなにザル警備でいいのかな？」

『なんだ分数か、エリオットの端末からなのにあいつの息遣いじゃねえから不思議だったんだ』

「そうやってお前は部下の事をよく知っても、それを伝えなきや部下たちは何も知らないよ？ 甘やかすところもあるんだから、気を付けないと俺みたいに潜入してくる奴に皆殺しにされちまうぞ」

いつも通りの会話をし、本題に入る。相変わらず男は椅子にされている。

『んで、今日はどうしたんだ？』

「なあに、お前の可愛い可愛い馬鹿息子の事で話があつてな。おい、あからさまにため息をつくな。大事にしていたアイツから逃げられたからつていつまでもいじけるなよ」

実の息子のように接してきた一方通行が、自分から離れた事を数年経つても忘れられないでいた。

「お前の教育方法も悪かつたんだぜ。お前、今のアイツが何をしてるか知ってるか？絶対能力進化^{レベル6ソフト}つて調べれば、すぐにお前の権限なら情報が出てくるさ」

カタカタと端末をいじる音が聞こえたあと、バキツと何かが壊れた音がした。

『あの愚息、こんな事をしやがつてたのか。おい！次の実験はいつだ！』

「そう焦んなよ。こつちもそれなりに手は打つてるさ。二日後の21日、そんな時が接触するのに最も適している。場所は操車場だ、詳しい場所は自分で調べとけよ」

くくく、笑いながら通信機の電源を切り持ち主に返す。

『何か昔に戻つてねえか？』

そんな弟子の言葉は届かなかつた。

とある決着のつき方

「なんだありやあ？」

「幻想殺しだ。良く親父から送られてきただろう？」

「へえあれが……」

10032回目の実験上である操車場で、木原二人は一方通行と幻想殺しの戦いを見ていた。最初は一方通行の圧勝であったが、一度上条が右腕を当てた時から攻守が入れ替わった。

「馬鹿息子が殴り飛ばされた」

「ちっ、俺が鍛えて体術を教える前に出て行くからあんな事になったんだ」

「ははは、まだそれを言うか。って、何か様子がおかしいぞ」

上条に殴り飛ばされた一方通行は突然笑い出した。その声量は離れてみている二人にも届くほどだった。

「何あいつの笑い方。怖いを通り越して、気持ち悪いんだが」

「それについてはノーコメントだ」

あつという間に、青白いエネルギーが一方通行の上に出来上がった。しかし、途中で形が乱れたため開放すると、その余波で上条が倒れた。

「ありやプラズマか？アイツじゃねえか」

「黙れ親バカ」

「そう褒めるな。あいつらを助けに行かなくていいのか？」

「ああ。これぐらい俺の後輩たちが自分たちで解決できる。んじゃ、俺達は第一位の回収に行きますかね」

「歯を食いしばれよ、最強——」

——俺の最弱は、ちつとばつか響くぞ」

両腕を振るって来た一方通行に対して下に潜ることで一方通行の攻撃を避ける。それを見て一方通行は追撃を掛けようと片腕を振るった。次は右腕で弾かれ、バランスを崩す。

そして、上条の敵意の感じられないほど穏やかな顔を見て、少し思考が止まった。その隙を見て上条がアッパーカットを放つ。見事に一方通行は宙を舞った。

吹き飛ばされた一方通行が動けなくなるのを確認してから、心身ともに極限状態だつ

た上条も倒れる。御坂は10032号に肩を貸し、二人して上条の元へ向かう。

「この賭けは俺の勝ちだな数多くん」

「ちっ」

御坂の能力によるレーダーの索敵範囲内から二人の人が出てきた。一人は顔に刺青をした御坂の知らない人物。もう一人は御坂の良く知る人物で、数日前に戦った人物だった。

「回収頼むよ」

その言葉が御坂に最悪な未来を想像させる。

レベル6になる為の研究を邪魔したとなれば、それだけで学園都市の闇に目をつけられるのは当然である。ましてや一方通行を倒してしまった。そんな上条が回収されてしまえば、きっと恐ろしい目にあってしまう。

そんな考えが彼女を突き動かす。

「ま、待ちなさいよ!!そいつは関係ないわ。だから、回収する必要なんてないのよ!!」

きよとんとした顔で分数は御坂を見る。

「……。何を言ってるんだ?」

「えっ!?!」

「回収するのは一方通行だけ?」

「でもあんたは実験の…」

「実験には協力はしてるが、別に本気でレベル6を目指してるわけじゃないし。本当なら20000体倒すまで放置するつもりだったが、ここ最近の倒し方が残虐過ぎるからな」

「おい分数、回収終わった」

「なら行くか。しかし、気絶してる時に能力発動できないのは学園都市最強としてどうなんだ？」

御坂はポカーンとしていた。この計画の重役的なポジションであり、数日前は研究所でこちらを妨害してきた彼が実は敵対していなかった。思考が全くまとまらなかった。

「そうだ」

木原が振り返る。

「近くにカエル顔の医者がある病院の救急車が停まつてるから、上条と妹達をそこまで運んでやれ。じゃーな」

「しかしそんな事をして良かったのですか？とミサカはあなたの予想外の行動に驚きな

がら尋ねます」

地下街の代表室でミサカ000001号が木原に聞いた。

「別にいいんじゃないか？そもそも父親はレベル6なんか目指してないし」

事の発端は『虚数学区』だった。超電磁砲の能力を応用して、それ専用のネットワークを構築する計画をアレイスターは立てていた。もとはその様な事ができる小さな機械を学園都市中に配置する予定であった。

しかし偶然その時、レイオノイズ計画が倫理的でないためボツとなっていた。そして、何故かその2つが合体し、移動可能な虚数学区発生装置の開発が主となった。研究員たちは良く分からず、クローンの性能を高めていった。

まだ不幸はあり。その最中に誰かが一方通行がレベル6になる為の条件をツリーダイアグラムで演算してしまい、妹達が使われることとなった。今までの研究が役に立つならと、研究者たちはこのレベル6計画に賛同してしまい、虚数学区というアレイスターの計画は崩れてしまった。

木原はその尻拭いをしていたに過ぎなかった。ドリー然り妹達然り。この地下街も元はといえば、過去の木原が行った実験や、最近引き取った被験者を社会に復帰させる為に作った都市であり、妹達の為だけではなかった。

「ミサカ達のことをお姉さまにお伝えするのですか？」と御坂は恐らく起こるであろう最

悪の展開を予想しつつ貴方に問いかけます」

ここでのミサカ達とは、妹達全般ではなく、死んだはずなのに地下街で生きている妹達のことを指す。

「それなんだよなあ。普通に言っちゃつても良いんだけど、そうなる何の因果か分からないけど、一方通行にも伝わっちゃったりしたら不味いしな。二人には少なからずの罪悪感や反省が生じてるだろうしな」

腕を組み顔をしかめて唸る。しかし、いくら考えても良案は出てこなかった。

「まあなるようになるだろう。バレたら伝えるってことで」

思考を放棄した。

「ところで、一方通行はどうなったのですか。とミサカは話を聞いて疑問に思ったことを伝えます」

「あいつか……。義父が能力開発、いや戦闘能力の強化を受けてるはずだ」

ミサカはよくわからなかったようで、首を傾げている。

「体がひよろひよろだし、今回は肉弾戦で負けてたし。仕方ないことだけどね。次に会う時までには細マッチョになってるらしいからさ」

けらけらと笑いながら木原は補足をした。

とある8月31日の過ごし方 そのいち

8月31日 未明

一方通行は一人路地を歩いていった。彼の纏う雰囲気は不機嫌そのものであつて、一ヶ月前なら喧嘩をふっかけてきたスキルアウトですら怯えるほどだった。

その原因はいたつてシンプルであり、謎の無能力者に倒されてからの日々にあつた。彼の父親（的存在）である木原数多による扱ぎが始まったのだ。それも、能力に関してではなく肉体に関してだった。

その際は能力の使用を制限された。独自開発されたチョーカーによる精神的攻撃。能力を使うと疲労感や寒気を感じるように設定された。それだけならば気にせず能力を使っていただろうが、そのチョーカーから数多のパソコンに能力の使用時間が送られ、その分扱ぎの時間が長くなったり、肩たたきや肩揉みなどやりたくないことをやらされたのだ。

「マッサージ屋さんかよ」

そのことを思い出して愚痴をこぼす。幸い周りに人はいなく、このつぶやきを聞いた者はいなかった。

能力を使って数多を殺しても良かったのだが、一方通行の中の何かがそれをさせなかった。

頭を振って思考を切り替える。今日は一方通行にとつて久々の外出である。いままで食事を管理され好きな物を食べられなかったため肉を食べたり、コーヒーを飲もうとしていたことを思い出す。

「……つてミサカはミサカは何度もあなたに尋ねてみたり。実は聞こえてるのに無視してるのかなーつてミサカはミサカはあなたの鬼畜ぶりに涙目になって訴えてみたり」

考えをごとをしていて聞こえてなかった耳に気になる言葉が聞こえた。声の方を振り返ると、ボロボロな毛布を身に着けた小さな何かがあった。

「なんだオマエ」

「やつと存在が認められたつて、ミサカはミサカは両手を上げて喜びの舞をしてみたり」
声の調子は彼の知っている『ミサカ』と全く違っていた。彼の知っている妹達はもつと感情がなかった。とりあえず毛布で隠れている顔を見るまでは何もわからないと結論付ける。

「毛布を取れ」

「これはダメかもつて、ミサカはミサカは研究所からずつと一緒の相棒を渡さないつ、やめてーつてミサカはミサカは無理やり毛布を剥こうとするあなたに訴えかけてみたり」

どうしても毛布を取らなそうな彼女に我慢できなく、無理やり毛布を剥ぐことにした。能力は使えないが数多^多、sブートキャンプのお陰で、女子供に負けることはない。それでも剥ぐのに数秒ほどの時間はかかったのだが。

剥いだ毛布の下から現れたのは、真っ白な肌だった。

きやー、という叫び声を聞きつつ一方通行は思った。これがアイツ^{数多}に知られたら半殺しにされるかもしれない。

a m 8 : 0 0

上条当麻は夏休み最後の日を最高の気分を迎えることが出来た。学園都市に来てから初めて、夏休み中に課題を全て終わらせることができた。これはインデックスに英語の教わったり、分数に開発関連の教科を教えてもらったり、御坂がお礼と称して一般教科を教えたからだ。

そして現在彼は、クラスメイトの土御門と青髪ピアスと一緒に街を歩いていた。夏休み最後の日であるため、学園都市の学生はすでに課題を終わらせ有意義な日になっているか、はたまた課題が終わらず缶詰状態になっているかのどちらからである。

といつてもここは学園都市であるため、後者はそれほどいいない。なのでこの日ばかり殆どの学生が街に出て最後の日を楽しく過ごすのである。故に多くの店がいつもより早く始まつたり、セールを行つたりする。

彼ら三人はゲームセンターに行き、いつもより安くそして長い間遊ぶつもりであった。ゲームセンターに行く途中、好きなタイプの話になり青髪ピアスがとても初見じゃ聞き取れないような早口で多くの属性を語るのを上条は聞き流していた。すると。

「どるーんまつた?」

大方どこぞのカップルが待ち合わせをしていたのであろう。未だ成れないリア充への憎しみを胸にしまい、二人との会話を続けた。

「待つたつて聞いてんでしょーが!!!無視すんなやゴラアアアア!!!」

先ほどと同じ声が聞こえたので、痴話喧嘩かと思つて後ろを体ごと振り向いた。すると、胸に衝撃が走りそのまま後ろに倒れてしまった。

倒れた状態で衝撃のあつた胸のあたりをみると、そこにはゆでダコのように顔が真っ赤に染まつた御坂がいた。当然、突然の出来事によつて上条の思考はストップした。

土御門と青髪ピアスはなぜ自分では無く上条なのかと嘆き、近くにあつた常盤台の学生寮からは御坂の行動に歓声が湧き上がり、寮長が二人を見ていた。この状況に耐えられなくなった御坂は、上条の手を取りその場から急いで立ち去つて行つた。

p m 8 : : 3 0

「どうしてあの類人猿をお姉様が……」

鬼のような形相をした白井がいた、場所は彼女が務めるジャツジメント支部。その場には初春と佐天、そして木原がいた。

「黒子、あの後輩の事なら好きないように言ってもいいが仕事はちゃんとしてくれよ。特に今日は多くの学生が街に出かけるから俺達の出番が増えるんだ」

もつともな事を言われた黒子だが、そんなことを言った木原を服装を見て尋ねる。

「分数さんはこれからどうするおつもりですか？」

「俺か？これから後輩と買い物だが」

自分で忙しくなると言つといて自分は働かない先輩に対して、プツンと何かギレた。

「ふしやー」

「白井さん落ち着いてください!!」

「そうですよ！佐天さんの言うとおり落ち着いてください。まだまだ白井さんが放つておいた仕事があるんですから」

暴れだそうとした白井を初春と佐天がとめる。

「でも、分数さんの私服って珍しいですね」

「そうかなあ？ 私は結構見たことあると思うんだけど」

話題は木原の私服へと移っていた。

「ジャツジメントの仕事をするときは基本制服だからな。その後何処かに行くとしてもそのままだし。それに、涙子がそんな気がするのは最近の能力開発で会ってるからだろう。基本白衣だが、その中は私服のことが多いしな」

「能力開発の方はどうなんですか、佐天さん」

佐天はバツの悪そうな顔をする。それを見て初春は何かを察して謝る。しかし、それを佐天は否定する。

「いやいや、まだそんなにちゃんと開発ってことしてないから」

「えっ？ そうなんですか？」

「私の知識が足りないと言いますか。AIM拡散力場の事を知らな過ぎて、座学しかしてないというか」

あはははと乾いた笑い声が生まれた。

木原が時計を見ると待ち合わせの時間に近づいていた。といつても待ち合わせは支部の前なのでそこまで焦る必要はない。

何となく色んな事が起こりそうだなと思いい三人に別れを告げて支部を出た。

とある8月31日の過ごし方 そのに

p.m. 9:00

「おまたせえ」

胸の谷間を強調するようにかけられたポーチと胸を揺らして食蜂はやっていた。セリフ的には小走りでやってくるものを想像させるが、体力がない彼女はゆつくりと優雅に歩いている。それに気づいた木原は開いていた端末を閉じそちらに視線を向ける。

「それほど待つてないから気にするな」

「それでも待たせたことに変わりはないの。だからねっ」

えいっと木原の腕に抱きつく。

「これがそのお礼。嬉しいかしら？」

「ああ。ありがとな」

確かに感じる心地良い感触に満足しながら二人は歩み始める。学園都市製の高級な服を着ている二人は真夏日にくつついていても、通気性やらなんやらのお陰で全く暑くないのだ。

これを見せつけられる平凡学生達は天候的な暑さといチャイチャした雰囲気を見せ

つける二人の暑さのダブルパンチを受ける事となる。

「それで今日はどこに行くのかしら？」

「日が出ているうちは街中をブラブラと。公園によつて適度に休憩を挟みながら、今日着るドレスを見にいこう」

「という事は、夜に素敵なことがまっているのねえ」

「そういうこつた」

「やっぱり分数さんはサプライズ力が素敵☆」

より一層ぎゅーつとする食蜂を連れて木原は街を歩いて行く。

p m . 10 : 00

「ここが噂のファミレスかい、ってミサカはミカサははしやいでみたり。わあ、こんなにたくさんメニューがあるってミサカはミサカはアナタに見せている」

「うぜエ」

モノクロの少年とワンピースの少女がとあるファミレスの一席にいた。少女は楽しそうに足をパタパタさせながらメニューを眺めており、少年は眠そうな目をしながらこの現状にため息をつく。

——どうしてこんなことになってやがる。

昨日と今日の境目。ひよんな事から打ち止めと出会った一方通行は面倒くさがりながらも、自宅兼研究所まで連れて行つた。そして数多に殴られた。

そしてなにかうるさいと思つて目を覚まして、自分があの一撃で眠つてしまつたこと、そしていま目の前で出会つた少女がワンピースを着てはしゃいでいるのが目に入る。それと同時に、そんな少女見て笑顔な数多を見たことを忘れたくなつた。

——飯に連れて行け。能力は使えるようにしとくから

そう言われて家を放り出された。そうしてきたのがこのファミレスだ。

「ねえねえ。何かお店の人が言つてるよ、ってミサカはミカサは報告するの」

肘をつき窓の外を眺めて回想していると、正面に座る打ち止めに服を引っ張られた。

「なんだ？」

打ち止めが指している方向を見るとウェイトレスが少し気まずそうな顔をして立っていた。

「お店が混雑しており、相席をお願いしたいのですがよろしいでしょうか」

「わりイが他を——」「いいいいよってミサカはミカサは店員さんの意見を聞いてみたり——おい」

言葉を割りこまれた一方通行が面倒くさいことになつたと思う事数十秒、先ほどの店員が客を連れてきた。

「それではごゆっくりどうぞ」

「ありがとな」

足音から二人と判断した一方通行の隣に一人、向かいの打ち止めの方に一人。

「よう、一方通行。ここで会うなんて偶然だな」

「アア!？」

隣には確率を操る能力者がいた。

「オマエなんでここにいやがる」

「へえ君が打ち止めか。アレの最長前がこのような感じだとわからないほど可愛らしいじゃないか」

「幼女力が高いわあ☆」

嫌そうな顔をする一方通行を放っておき二人して打ち止めに愛で始める。

打ち止めは食蜂に抱きつかれたわわと実った胸に隠れてしまう。

「はわわわ、あなた誰なのってミサカはミカサはあまりにも急すぎる展開に付いて行けなっ、あわわわっ!!!」

「おい」

「わりいわりい。寂しがりやなウサギちゃんも構ってやらなきやな」

堪忍袋の緒が切れる音ともに一方通行は隣に座る木原に右手を伸ばす。触れれば必

殺即死の手は確かに木原の体に届かない。ソファーに深く寄りかかる事で腕を躲す。

「どうしたよ?」

「お得意の確率操作はどうした?」

「ははは、今日使えるのは観測だけなんだ。だからあまり攻撃してくれるなよ」

メニューを見ながら淡々と答える。いい事を聞いたとばかりに木原に攻撃を仕掛けるが少し体を動かすだけやメニューを使って全て不発に終わる。

「あまり攻撃するなよ。結構確率的には曖昧だから下手したら本当に死ぬ。それで打ち止めは何食べたいか決まった?」

「うんっ!てミサカはミカサはそんな生命の危機に面しているのに普通に話しかけてくるアナタに驚きながら相づちしてみたり」

「それじゃ、その呼び出しベル押ししてもらってもいい?」

何とか食蜂から抜け出した打ち止めはえいっとボタンを押す。まもなくしてウエイトレスがやって来る。

「(イ)、(イ)注文は?」

明らかに木原と一方通行の攻防を見てひいてはいるのだが、木原はそんな事を意に返さずそのまま注文をする。

「ドキドキオムライスとシーザーサラダ。それと、最強ハンバーグステーキコンビ。打

ち止めは何を頼む?」

「お子様セット! つてミサカはミカサは元気よく注文してみたり!!」

ウエイトレスが注文してその場を立ち去った。

「何勝手に頼んでやがんだ?」

「打ち止めが食べたそうにしてたものをね。気になる物があったら一口あげようと思つて」

「随分と優しいな。木原とは思えねエ」

実験対象を使い捨てる木原とは思えないほどの優しさ。しかし現に彼からは木原の臭いがしている。

「未来ある子供は大切にするものだ。それが産まれることを望まれていなかった子だとしても」

その考えが理解できない一方通行は舌打ちをして窓の外を見る。そこには天井垂雄が血相を変えて車に乗り込もうとしているのが見えた。

それを見た一方通行は席を立ち後を追おうとするがタイミング悪く料理が運ばれ、それは叶わなかった。

「それじゃあいただこうかしらあ」

「それじゃアレしたいってミサカはミカサは手を合わせてみたり」

「それじゃ打ち止め頼む」

「はい！いただきますっ！！てミサカはミカサは大きな声でいつてみる」

「いただきます」

一方通行以外の三人が声を揃えていただきますと言う。一方通行はいきなりベクトル操作で熱ベクトルを操り鉄板を鷲掴みにしてステーキを切っていく。

「それは人間としてどうよ」

「食えればいい」

持ってきてもらった分け皿にオムライスを少し移し打ち止めに渡しながら木原がつぶやく。

「おねえちゃんはそので足りるの？」

「私はこれで十分よお」

既に仲良くなつた食蜂と打ち止めは和気あいあいと食べている。

「ちっ！」

その風景に嫌気が差した一方通行はある程度口に詰めたら席を立った。

「どこに行くんだ？」

「何処でもいいんだよ？」

「そうか。まあ、暇があるなら芳川桔梗に会いに行け。何かしらヒントになることがあ

るかもしれない」

ちよつとずれた木原を尻目に一方通行は席を離れていく。

それからしばらく会話を続けていると、前触れもなく突然テーブルに突つ伏す。

「あ、れ？ミサカはどうしてつてミサカはミカサは……」

「今は喋らなくていい、ゆつくり深呼吸をしてろ」

料理を移動させ苦しそうにする打ち止めの頭をなでる。

「これからどうするのかしら」

「取り敢えず緊急パッチをあてて、移動だな。ここに置いていった場合サイアクノコトガ起こつてしまう」

例えば打ち止めの死、それに近い何かだ。

「とりあえずは場所を移そう。ちよつと近くによさそうな人たちが集まっている」